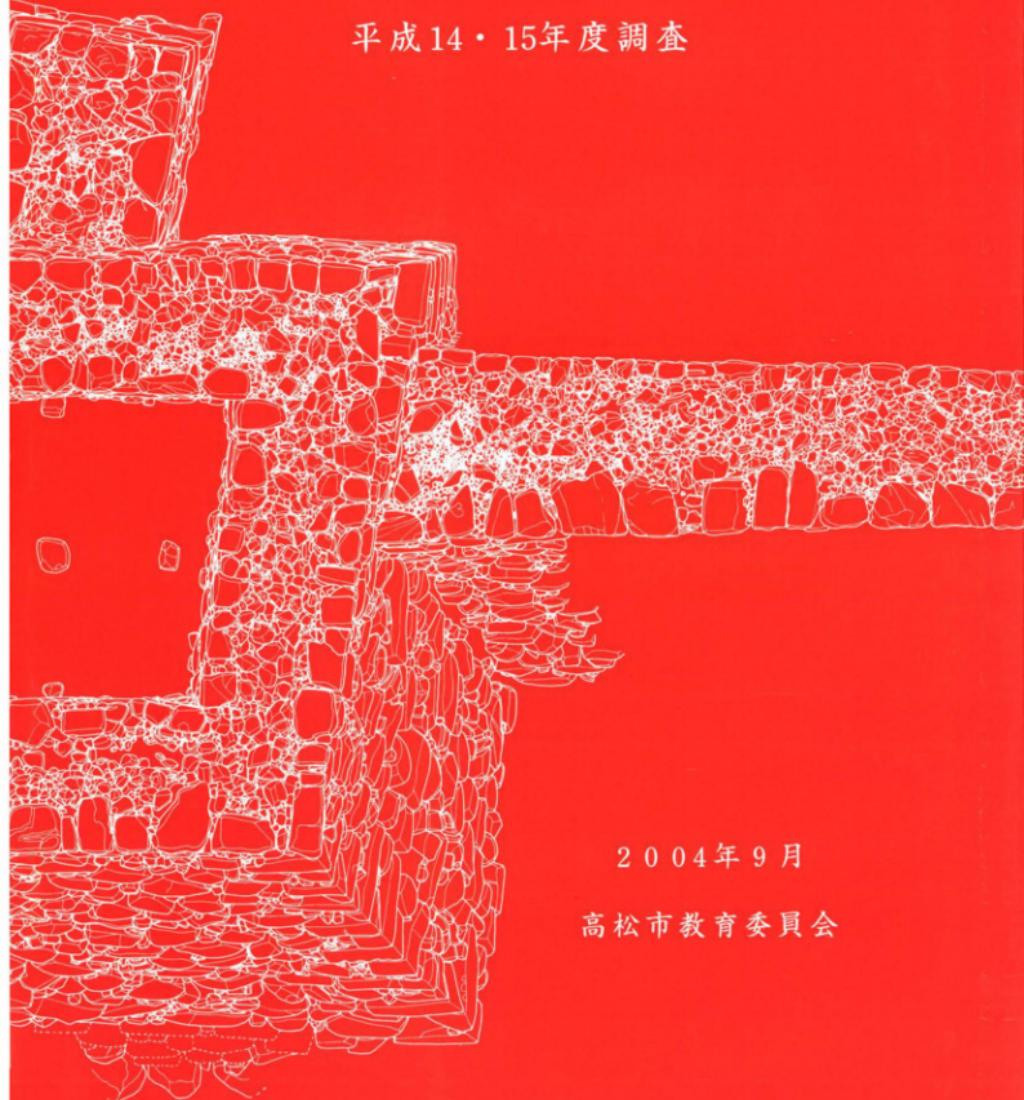


史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報

平成14・15年度調査



2004年9月

高松市教育委員会

例　　言

- 1 本報告書は、高松市が実施している史跡高松城跡地久櫓石垣保存整備事業に伴うもので、高松市玉藻町に所在する史跡高松城跡地久櫓台の平成14・15年度の調査概要報告を収録した。
- 2 発掘調査および整理作業については、高松市教育委員会が実施した。
- 3 調査から概報作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)
香川県教育委員会　香川県歴史博物館
東　信男（丸亀市教育委員会）　大山真充・片桐孝治・松本和彦（香川県教育委員会）
片桐節子　川村教一（高松高等学校教諭）　乘松真也（香川県歴史博物館）
松田朝由（大川広域事務組合）　本中　眞（文化庁）
- 4 高松市と高松市教育委員会は、平成15年度より高松城跡整備検討委員会を設置しており、下記の委員の助言と指導を得た。(敬称略、会長・副会長以外は五十音順)
会長 渡辺定大（（株）都市計画研究機構）　副会長 吉田重幸（元香川大学農学部教授）
牛川喜平（京都橘女子大学文学部教授）　木原博幸（徳島文理大学文学部教授）
五味盛重（財）文化財建造物保存技術協会参与　西　和夫（神奈川大学工学部教授）
- 5 調査は、平成14・15年度とともに文化振興課文化財専門員川畠聰が実施し、臨時の任用職員大朝利和がこれを補佐した。整理作業は川畠が実施した。
- 6 本概報掲載の写真撮影は、西大寺フォトに委託した。
- 7 本概報の編集・執筆は、川畠が行った。
- 8 本文の挿図として、高松市都市計画図1万分の1「中心部」を一部改変して使用した。
- 9 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 10 本概報の高度値は海拔高を表し、方位は座標北を表す。国土座標数値は、平成11年度のものを使用している。

目　　次

例言・目次	1
第1章　調査の経緯と経過	
第1節　調査の経緯	2
第2節　調査の経過	2
第2章　地理的環境・歴史的環境	
第1節　地理的環境	4
第2節　歴史的環境	4
第3章　調査の成果	
第1節　地久櫓台の概要と基本層序	7
第2節　地久櫓台・本丸南上堀台からの出土遺物	25
第4章　まとめ	
第1節　地久櫓台の構造と年代について	35
第2節　高松城築城以前	35

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

史跡高松城跡地久櫓台は、本丸南西の隅に位置し、江戸時代には本丸は内堀によって囲まれていた。昭和23年（1948）に本丸西側の内堀は埋め立てられ、その後高松琴平電気鉄道の築港駅と線路が敷設された。このため、地久櫓台はこの線路と接するようになったが、その後、櫓台の隨所に孕みや石材の割れが見られるようになり、線路への落石が懸念された。このため、高松城跡を管理する高松市では、平成10年度より国庫補助事業として地久櫓台の解体および復元を目的とした石垣整備事業を実施しており、これを受けて高松市教育委員会は平成11年度の解体時より必要な発掘調査を行っている。

第2節 調査の経過

平成10年度の整備事業は、櫓台の解体は実施しないで、櫓台西面（B面）すなわち鉄道線路側において、落石防止用ネットを設置するのみであった。このネットを固定する支柱用アンカーを設置するため、櫓台北南北隣接地において一部掘削を行ったが、北隣接地はすでに前年度に調査を終了しており、また南隣接地も北隣接地の調査状況から問題ないと判断されている。

平成11年度の櫓台解体は石垣最上段のみであることから、発掘調査も櫓台上面の遺構検出にとどめた。その結果、時期不明の礎石列と地下式構造物を想定させる石積が確認された。

平成12年度では、櫓台上部つまり約1/4を解体することから、前年度に想定された地下式構造物の検出を主目的に発掘調査を実施した。その結果、櫓台上部において一辺約5m四方の平面四角形で深さ約2mを測る地下室（穴藏）を検出した。この地下室は、四壁が石垣で、床は礎石を十字に配した土間となっており、造り付けの階段は認められないことから梯子等によって昇降していたと想定される。地下室の調査終了後は、櫓台解体時の立会調査に切り替え、櫓台内部の構造解明に努めた。また、櫓台北東隣接地すなわち本丸平垣地においてトレンチ調査を実施し、時期不明の礎石・石列を検出した。これは、翌年度以降の櫓台解体に伴い本丸平坦地の一部も削平される可能性があることから、事前に遺構の状況を確認することを目的としている。

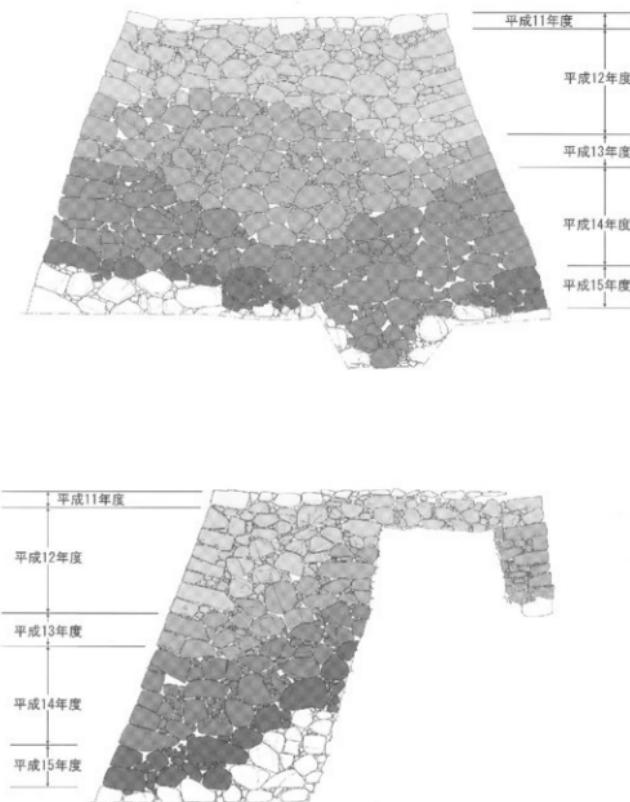
平成13年度の櫓台解体は、櫓台中程を対象として規模は全体の約1/4である。櫓台北東辺では根石にまで解体が達することから、発掘調査はこれら根石の検出を目的として実施した。その結果、根石は地面に直接据え付けていることが判明した。その後は、櫓台解体時の立会調査に切り替え、櫓台内部の十層堆積状況を確認した。また、櫓台に接する本丸南上屛台および西土屛台も、工事の安全を確保するため、櫓台解体に合わせて一部を解体した。これに伴う立会調査を実施し、内部の上層堆積状況を確認している。

平成14年度の櫓台解体は、主に櫓台下部を対象として規模は全体の約1/4である。調査の方法は、櫓台解体時の立会調査であり、櫓台内部の上層堆積状況を確認するとともに、グリ石・盛上層から出土する遺物の採集を行った。その結果、櫓台内部は砂・粘土・礫で充填されており、版塗が認められた。また、中世を中心とする遺物が出土することから、高松城築城以前に存在した中世集落の存在を想定できた。

さらに、櫓台下部構造を解明するため、櫓台南面（C面）石垣の根石を1箇所のみ吊り上げ、調査終了後は元に戻した。その結果、根石下には桐木などの特別な構造物は認められず、砂礫層の上に直接根石を設置していたことが判明した。

また、櫓台の地下構造を解明するためボーリング調査を実施し、櫓台が比較的安定した砂礫層の上に築造されていることが判明した。

平成15年度の檜台解体は、檜台下部と本丸南土壠台を対象とし、規模は最小限に留め、現状保存を目的とした養生を実施した。これは、隣接する電車軌道が撤去される予定であったが、軌道の高架事業が遅れたため、軌道除去後に予定していた檜台解体が不可能となつたためである。調査は、平成14年度同様に檜台内部の土層堆積状況を確認するとともに、グリ石・盛土層中から出土する遺物の採集を行い、同様な成果を得られた。



第1図 地久檜台年度別解体状況（上段：檜台南面（C面）、下段：檜台東面（D・F・H面））

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のはば中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。また、この平野は、讃岐山脈から流下し、北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。

さて、高松城の城下町として発展した高松市街地は、香東川の東流路が瀬戸内海に注ぐ河口の中洲や砂堆上に立地している。このため、城下町は高松城築城と同時にこの中洲や砂堆を大規模に埋め立てて形成されたと考えられている。香東川は、現在、石清尾山塊の西を直線に北流する西流路のみだが、17世紀初頭、高松藩に招かれた西郷八兵衛の利川改修によって一本化されたものである。なお、17世紀の魔川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

第2節 歴史的環境

高松市街地の下に埋没している中洲や砂堆上に初めて人の活動が認められるのは、弥生時代後期である。高松城内南の武家屋敷跡で行われた発掘調査（新ヨンデンビル別館）では、ベースとなる砂層上面より柱穴とともに弥生土器が多く出土し、付近に集落が存在していた可能性が指摘できる。この発掘調査では、平安時代前期の溝もわずかながら確認している。

この地域の土地が安定し、人が恒常に居住できるようになるのは平安時代後期と考えられる。当時、この地域は笠原郷と呼ばれ、安楽寺院領である野原庄が高松城跡の南方に所在していた。野原庄は、白河院の勅使出が応徳年間頃（11世紀末葉）に立券莊号されたものである。康治2年（1143）8月19日の太政官符によれば野原庄の四至が条里によって表記されていることから、土地が安定し条里地割または条里呼称がこの地まで普及していたと考えられる。

さらに時代が下ると、莊園としての機能以外にも、文安2年（1445）の「兵庫北関入船納帳」には船籍地として名前が記載されていることから、中世においては港町としての機能を有していたと考えられる。時代は遡るが、高松城跡西の丸地区の発掘調査では、11世紀後半～13世紀前半の護岸施設とともに県外から搬入された土器が高い比率で出土している。さらに、西の丸地区に隣接する浜ノ町遺跡では、白磁四耳壺を埋納していた13世紀末から15世紀末の集落跡が確認されている。

一方、高松城跡東の丸地区に目を転じると、16世紀後半以前の漁民の墓群が検出されている。城跡より南東方向にある片原町遺跡においては、15～16世紀に属するL字形の大溝を検出しており、これは居館の外側にめぐらしていた堀の一部と考えられている。

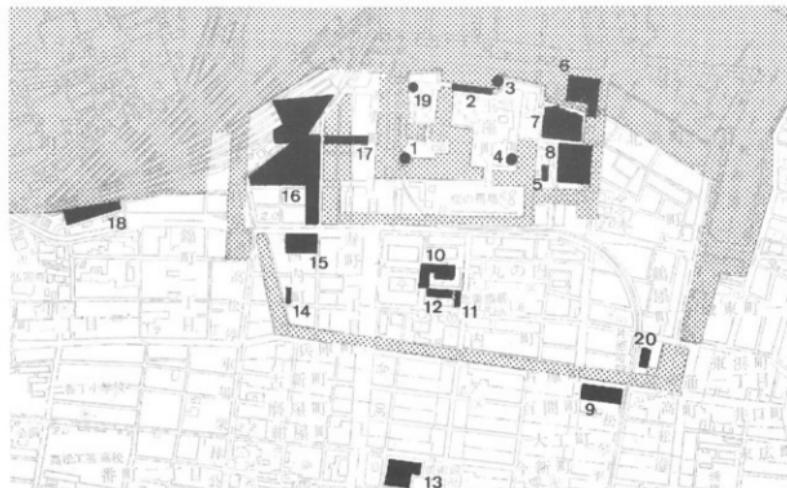
このように、高松市街地下において、古代末から中世の集落等が確認され、文献からもうかがえるように、かつて港町が栄えていたと考えられる。この砂堆や中洲上に中世都市が立地する状況は、博多や草戸千軒遺跡にも見られるように全国的な傾向であり、これらの都市をつなぐ交易が行われていたのであろう。このような時代背景のもとに、高松城がこの地に築かれ、城下町が整備されたと考えられる。



第2図 遺跡位置図

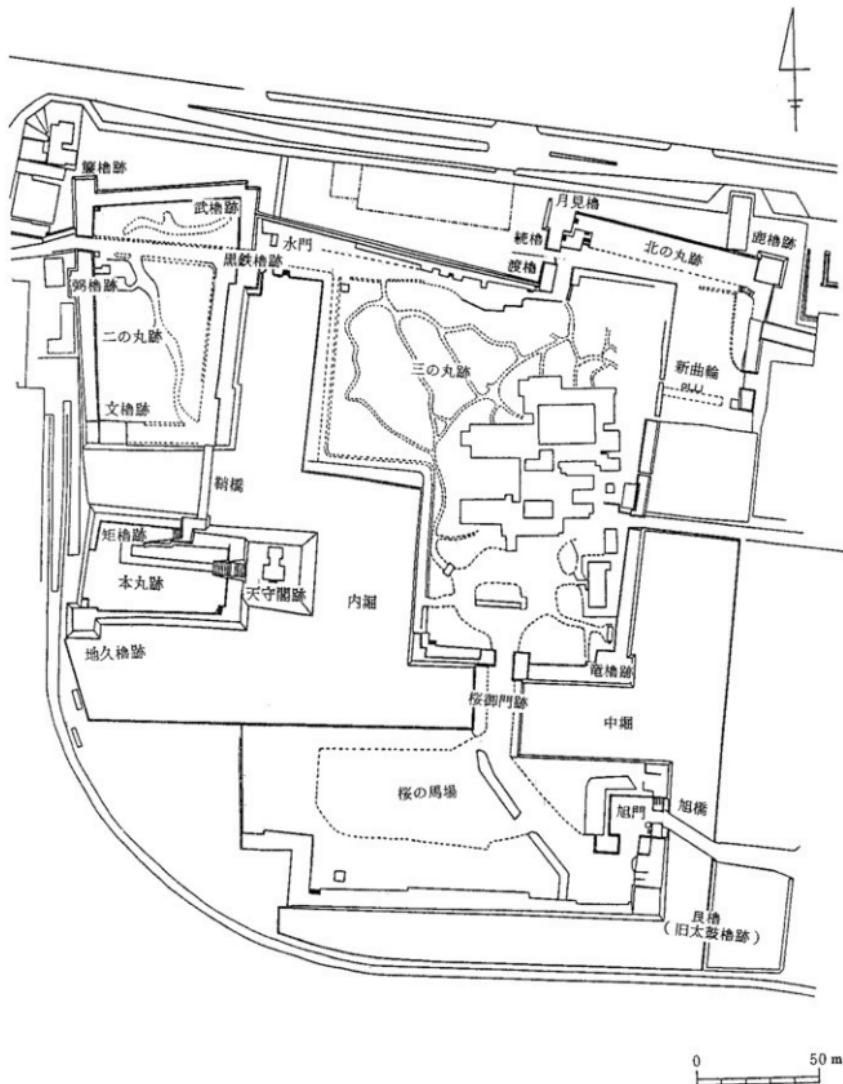
さて、この高松城および城下町を造ったのが、豊臣秀吉の家臣であった生駒親正である。豊臣秀吉の四国征伐により、天正13年（1585）長宗我部元親が降伏し、讃岐国は仙石秀久・十河春保に与えられ、その後尾藤知宣の領国となったが、天正15年（1587）生駒親正が入封し、讃岐17万石を領した。高松城は、生駒親正の居城として、翌天正16年から築城され、数ヵ年を要して完成されたといわれている水城である。水城と呼ばれる由縁は、北の守りを瀬戸内海にゆだねるだけでなく、堀には海水が導かれているからである。また、南方には大手（旧太鼓門）を構え、城の南側に城下町が展開する「後堅固」の城でもある。城の構造は、内堀・中堀・外堀といった三重の堀をめぐらし、内堀より内側には本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪を配している。本丸は、さらに堀によって他の曲輪と独立しており、本丸と二ノ丸をつなぐ薙橋を落とすことによって敵の侵入を防ぐ構造となっている。本丸には、天守閣と地久櫓が設けられており、今回の発掘調査対象となったのが小天守の役割を担っていたと考えられる地久櫓の櫓台である。

寛永17年（1640）御家騒動により生駒氏は出羽国矢島に転封となり、寛永19年に代わって松平頼重が高松城主となり、東讃岐12万石を領した。松平頼重は、城の改修を度々行っているが、寛文11年（1671）頃の大規模な改修では、東ノ丸を造成するとともに、月見櫓・続櫓・渡櫓などを造り、北に設けた水手御門より直接海へ出入りができるようになっている。その後、松平氏は高松城主として明治維新を迎える。一方、高松城は昭和29年（1954）に松平氏より高松市に譲渡され、翌年玉藻公園として市民に開放されるとともに、史跡として国指定され文化財の保護が図られている。しかしながら、明治17年（1884）に天守閣が取り壇されるとともに、都市化の波によりしだいに堀は埋め立てられ、本丸近くまで市街化が進んでいる。このような状況の中、高松市では平成8年に史跡高松城跡保存整備基本計画を策定し、城の復元整備を目指しており、地久櫓台石垣保存整備もこの一環である。



- | | | | |
|-----------------------|----------------|--------------------|--------------------|
| 1 高松城跡地久櫓台 | 2 高松城跡三ノ丸石垣 | 3 高松城跡水手御門 | 4 高松城跡三ノ丸(他目的トイレ) |
| 5 高松城跡作事丸 | 6 高松城跡(旧)艮櫓台突堤 | | 7 高松城跡東ノ丸(県民ホール) |
| 8 高松城跡東ノ丸(県歴史博物館) | | 9 片原町遺跡 | 10 高松城跡(新ヨンデンビル別館) |
| 11 高松城跡(弁護士会館) | | 12 高松城跡(家庭裁判所) | 13 組屋町遺跡 |
| 14 高松城跡(PTA会館) | | 15 高松城跡西ノ丸(高松北警察署) | |
| 16 高松城跡西ノ丸(サンポート高松) | | 17 高松城跡中堀(高松駅南線) | 18 浜ノ町遺跡 |
| 19 高松城跡二ノ丸(玉藻公園四門料金所) | | 20 高松城跡(鶴屋町共同住宅建設) | |

第3図 高松城跡周辺主要調査位置図（縮尺1/10,000）



第4図 史跡高松城跡平面図（縮尺 1/2,000）

第3章 調査の成果

第1節 地久櫓台の概要と基本層序

地久櫓は、本丸南西の隅にて城を堅守するために築かれたものである。天守閣は本丸東を占め、他に大きな櫓が本丸にないことから、地久櫓は小天守的役割を担っていた重要な櫓と考えられる。

地久櫓は、明治17年の天守閣取り壊しと前後して同じ運命を辿ったと考えられ、現在は櫓台のみが残っている。櫓台は、第7図のとおり、上面が南北約9.0m×東西約9.0～10.5mを測る四角形である。つまり、南辺が約9.0mに対し北辺が約10.5mと長く、本丸側である北東隅が突き出た四角形となっている。下面は内堀に接する南辺と西辺が $14.0 \times 14.0\text{m}$ 以上の正方形、高さ約10mの規模をもつ。櫓台東面に本丸南土塀台が、北面に本丸西土塀台が取り付いている。南土塀台は、幅2.4～2.8mで、外側石垣の高さは海水面より約7.8m、内側石垣の高さは約2.2mである。南土塀台の幅は、櫓台取り付き部分がもっとも広く、櫓台から離れるに従い狭くなっている。西土塀台は、幅2.6mで、外側石垣の高さは約6.0m、内側石垣の高さは約2.2mである。西土塀台の外側石垣の高さが、櫓台や南土塀台よりも低いのは、下部が埋められているからである。櫓台南側には今でも内堀が水をたたえているが、西側は埋められてしまい往時の姿をとどめていない。

この地久櫓を含む高松城の往時の姿は、初代高松藩主松平頼重の時に描かれた「高松城下図屏風」(第5図)などによって知ることができる。天守閣は南蛮風の外観3層内部5層の建物であり、地久櫓は黒壁で瓦葺きの2層の建物として描かれている。本丸を囲んで板葺きと考えられる土塀があげられ、本丸内には平屋の建物を見ることができる。

【調査の方法】

発掘調査前は、中央がやや盛り上がった状態であった。十字に土層観察用畦畔をのこして掘削を開始した。次に地下室埋土を掘削するにあたり、十字の上層観察用畦畔を踏襲した上で、平面を4等分し、1/4ずつ地下室床面まで掘削した。これ以後は石垣を解体しなければ調査が不可能であることから、櫓台解体に伴う立会調査に切り替えた。立会調査では、櫓台の南北断面上層図を作成することに主眼をおき、石垣グリ石層や各土層から出土する土器を取り上げた。また、石垣の石材や刻印についても併行して調査した。

【櫓台の基本層序】

地久櫓台に本丸西土塀台を含めた南北方向の断面は、第6図のとおりである。まだ解体途中であるが、現時点で約70層に分層が可能である。これらを大きく分けると、次の7区分となる。

《第1・2層》

第1層は搅乱。第2層も昭和26年銘の5円玉が出土しており、昭和26年以降である。第1・2層を除去すると櫓台中央が四辺の石垣に比べ約60cm窪んだ状態となり、第2層が黒褐色シルト質極細砂であることから、降雨時など一時的に水が溜まっていたと考えられる。

《第3・4層》

櫓台上面にあった礎石群を置いていた土層である。第3・4層に色調・土質の違いはないが、第4層に漆喰が多く含まれており、地盤を安定させるためと考えられる。第3層の一部が礎石上面を覆っていたことから、もともと礎石が第3層中に埋まる形であったか、建物の重量で礎石が第3層中に沈み、礎石が使用されなくなった後に風化した第3層の一部が礎石を覆った可能性がある。第3・4層は、櫓台中央に向かって窪んで堆積している。

《第5～10層》

櫓台中央にあった地下室の埋土である。地下室中央に向かって窪んで堆積している。第7層最下部

には、庵治石破片の疊層があり、第9・10層直上には1.5m四方の石組があり、この石組を第7層が覆っている。

《櫓台北面石垣と地下室北石垣の間のグリ石層》

櫓台石垣と地下室石垣の間を埋めている土層はa～k層が基本であるが、櫓台北東部分のみグリ石を充填していた。a～k層は17世紀の遺物が出土しており古いもののものが、このグリ石層は瓦片を多く含むなどa～k層より新しい様相を呈している。第7図の平面図でも看取できるように、櫓台北東部分は他の部分と違って細かい石を使用している。

《a～⑤層》

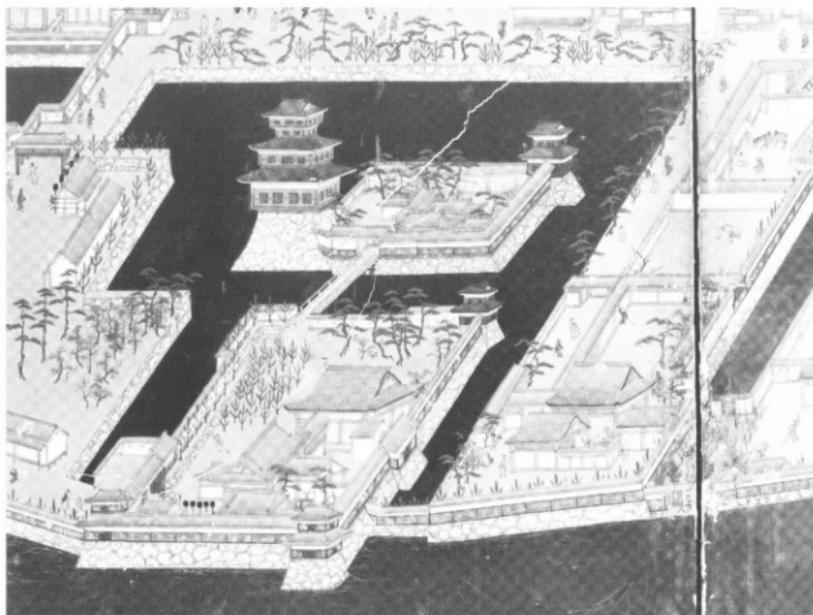
地久櫓台から本丸西十番台にかけて見られる土層である。櫓台から土堀台に向かって傾斜しており、これは第11～37層と同じ様相を示す。シルト質極細砂をブロック状に含む細砂を主体としている。この上層の上に先ほどの櫓台北面石垣と地下室北石垣の間のグリ石層や西上堀台のグリ石層がのっていている。

《a～k層》

櫓台石垣と地下室石垣の間を埋めている土層である。水平に堆積している。それぞれの土層の厚さが薄く、シルトと細砂の互層であることから、櫓台石垣と地下室石垣の間という狭い空間で、両方の石垣の強度をもたすためにされた工夫と考えられる。

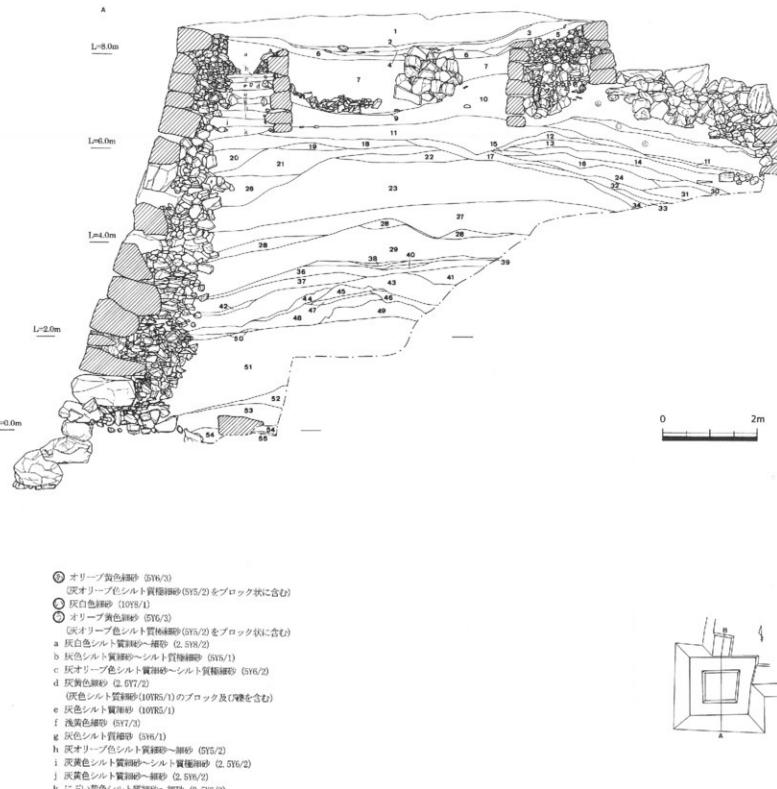
《第11～55層》

櫓台で主体をなす土層である。櫓台中央が一番盛り上がり、周囲に向かって緩やかに傾斜する堆積である。使用されている土は、細砂がほとんどである。この細砂は中世遺物を含むが、これは高松城築城以前にあった中世集落に伴うものと考えられる。ただし、櫓台下部（第41～43層以下）においては、砂に粘土をブロック状に入れるか、または砂と粘土の互層による版築が認められた。主に細砂と粘土が使用されているが、最下部近くでは粗砂または礫を使用している。

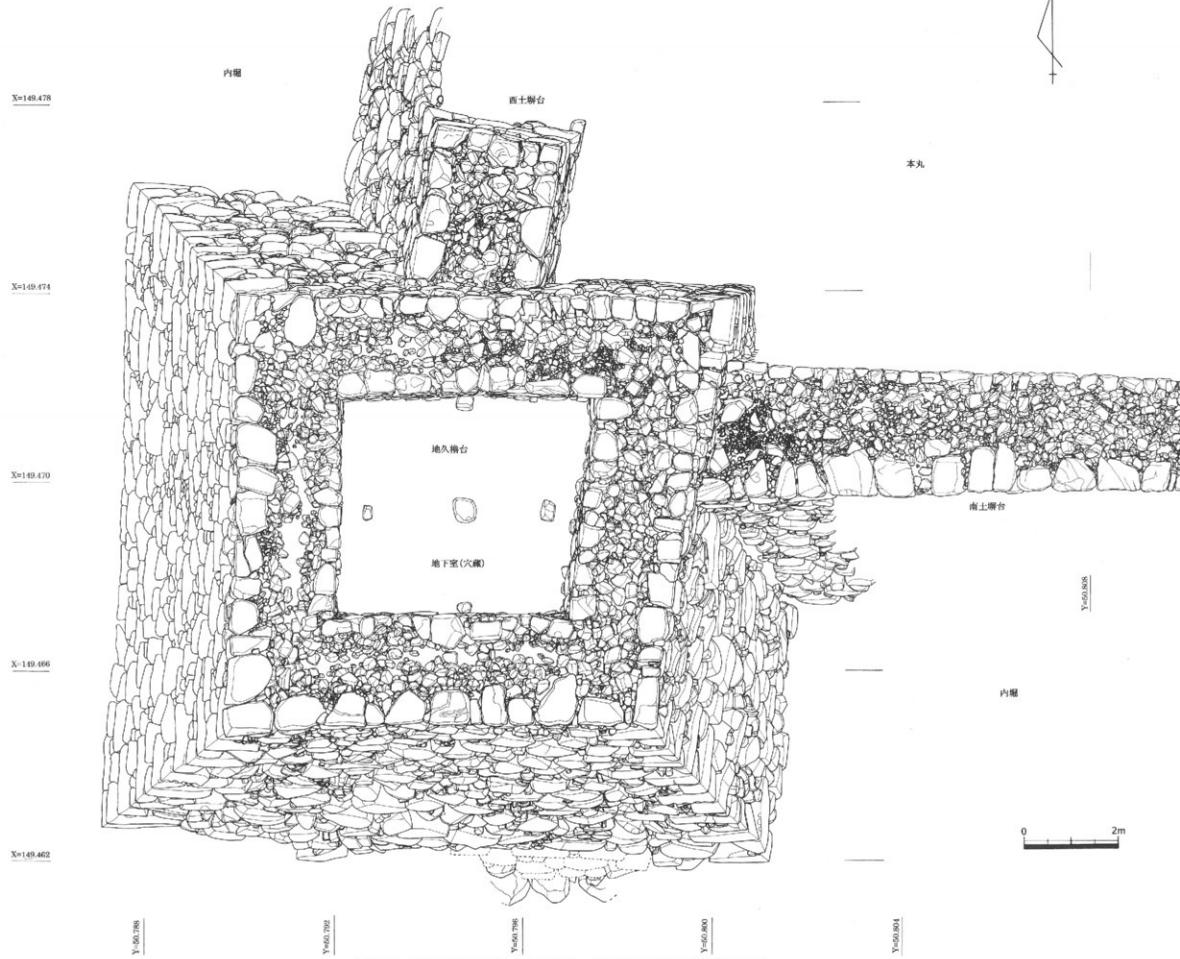


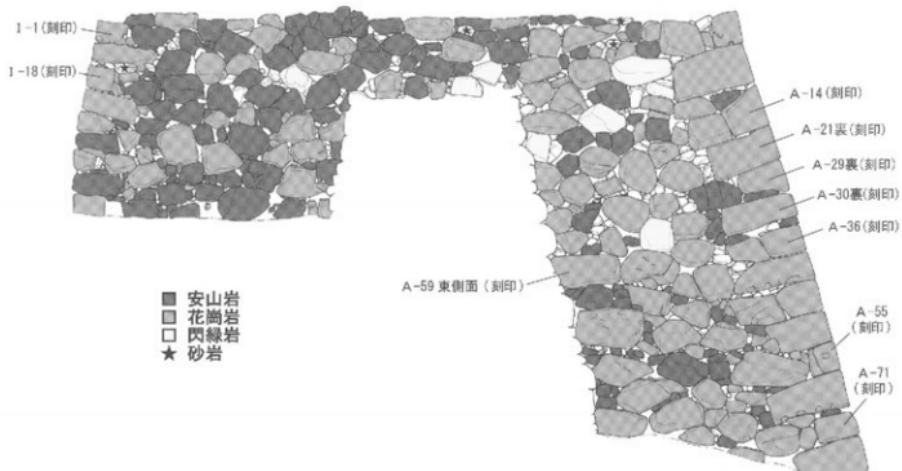
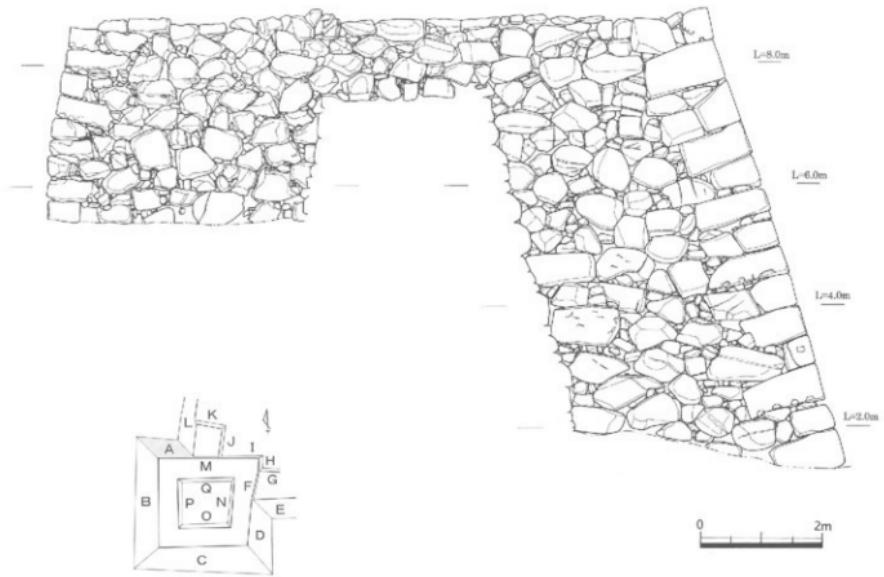
第5図 高松城下図屏風（香川県歴史博物館所蔵、北からの鳥瞰図）

- 1 深山
 2 黒褐色シルト質粘土層 (SY2/1)
 3 褐色シルト質粘土層 (2. SY7/3, 滅失はほとんど無し)
 4 黄褐色シルト質粘土層 (2. SY7/4, 粘塊が多く含む)
 5 にごり黄褐色シルト質粘土層 (10SY5/4)
 6 にごり黄褐色砂 (2. SY6/4)
 7 淡赤リード色シルト質粘土層 (2. SY6/2, 表面で目立つ現行が顕著となる。粘塊も含む)
 8 灰褐色シルト質粘土層 (2. SY6/2, 黑・緑・黒鉛を含む)
 9 深オーリーブシルト質粘土層 (SY5/2, 鉄鉱を含む)
 10 にごり黄褐色シルト質粘土層 (2. SY6/2, 粘塊を含む)
 (深赤色 (10SY6/1) シルト質粘土層が付属する)
 11 黄褐色砂層 (10SY6/1, わずかに小礫を含む)
 12 オーリーブ褐色砂層 (2. SY4/2, わずかに小礫を含む) +灰白色細砂 (10SY6/1)
 13 灰褐色シルト質粘土層 (10SY5/2)
 14 にごり黄褐色砂層 (10SY7/2)
 15 にごり黄褐色シルト質粘土層 (10SY6/4)
 16 灰褐色シルト質粘土層 (10SY5/1)
 17 黑褐色シルト質粘土層 (10SY5/1)
 18 褐褐色シルト質粘土層 (10SY5/1)
 19 明るい褐色砂層 (10SY7/6)
 20 灰褐色シルト質粘土層 (10SY7/6)
 21 灰褐色シルト質粘土層 (10SY7/2)
 22 灰褐色シルト質粘土層 (10SY6/1)
 23 にごり物質混入層 (10SY7/2)
 24 灰褐色シルト質粘土層 (10SY4/1)
 25 灰褐色シルト質粘土層 (10SY4/1, グリ石間に詰った土)
 26 灰褐色シルト質粘土層 (7. SY6/1)
 27 帯状黄褐色シルト質粘土層 (2. SY5/2, 砂を含む)
 28 浅灰色細砂層 (2. SY7/4)
 (深赤色シルト質粘土層 (10SY5/1) +滅失鉱を含む)
 29 灰褐色細砂層 (2. SY6/2)
 30 灰褐色シルト質粘土層 (10SY4/6)
 31 にごり黄褐色シルト質粘土層 (10SY4/2)
 32 可塑性地層 (10SY6/6)
 (0.5m先シルト質粘土層 (10SY6/4) が部分的に混入)
 33 深褐色シルト質粘土層 (2. SY2/4)
 34 灰褐色シルト質粘土層 (7. SY6/2)
 35 明褐色砂層 (7. SY6/5, 砂を多く含む)
 36 灰褐色シルト質粘土層 (7. SY6/1)
 37 黄褐色細砂層 (2. SY4/1) +にごり黄褐色細砂層～中砂 (2. SY6/4)
 38 灰褐色シルト質粘土層 (7. SY6/1)
 39 灰褐色細砂層 (2. SY7/4)
 40 灰褐色シルト質粘土層 (2. SY4/1)
 41 灰褐色シルト質粘土層 (2. SY5/1, 淡黄色シルト質粘土層 (SY6/4) をブロック状に含む)
 42 灰褐色シルト質粘土層 (2. SY5/1, 淡黄色シルト質粘土層 (SY6/2) をブロック状に含む)
 43 灰褐色シルト質粘土層 (2. SY5/1) +淡黄色シルト質粘土層 (SY6/2) のラミナ構造層
 44 灰褐色シルト質粘土層 (2. SY5/1) +明黄色シルト質粘土層 (10SY1/6)
 45 灰褐色シルト質粘土層 (7. SY7/2)
 46 灰褐色シルト質粘土層 (7. SY5/1) +淡黄色シルト質粘土層 (SY6/3)
 47 灰褐色シルト質粘土層 (7. SY4/1, 明黄色シルト質粘土層 (2. SY7/6) をブロック状に含む)
 48 灰褐色シルト質粘土層 (7. SY7/1, 明黄色シルト質粘土層 (2. SY7/6) をブロック状に含む)
 49 灰褐色シルト質粘土層 (7. SY5/1, 淡黄色シルト質粘土層 (7. SY7/1) をブロック状に含む)
 50 浅黄色細砂層 (2. SY7/4)
 51 にごり黄褐色細砂層 (2. SY6/1, 灰褐色シルト質粘土層 (NT) をブロック状に含む)
 52 黄褐色細砂層 (7. SY7/7, 灰褐色シルト質粘土層 (NT) をブロック状に含む)
 53 灰褐色シルト質粘土層 (7. SY7/7, 明黄色シルト質粘土層 (NT) をブロック状に含む)
 54 にごり黄褐色細砂層 (10SY6/4, 下に灰褐色シルト質粘土層 (NT) と灰褐色ブロック状に含む)
 55 灰褐色細砂層 (NT, 5~30cm大の礫を含む)

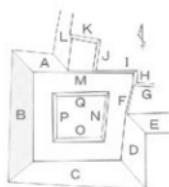
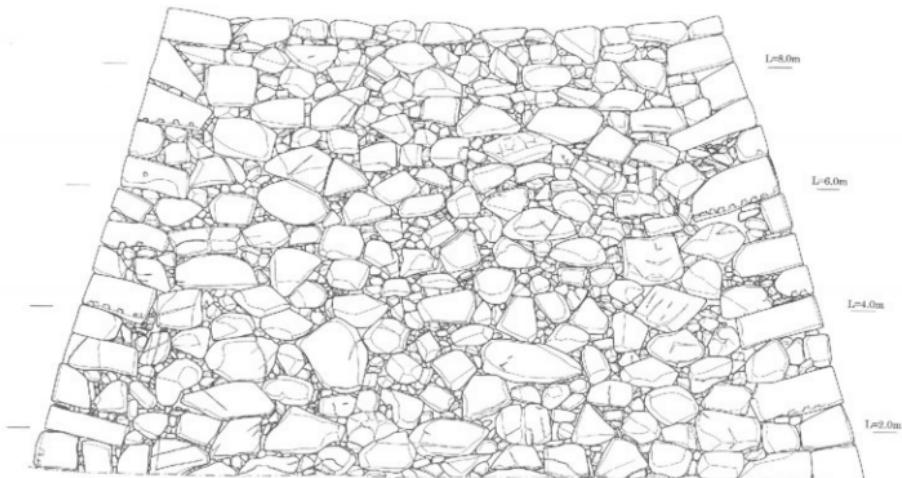


第6図 地久檜台および本丸西土壌台南北断面図（縮尺1/80）

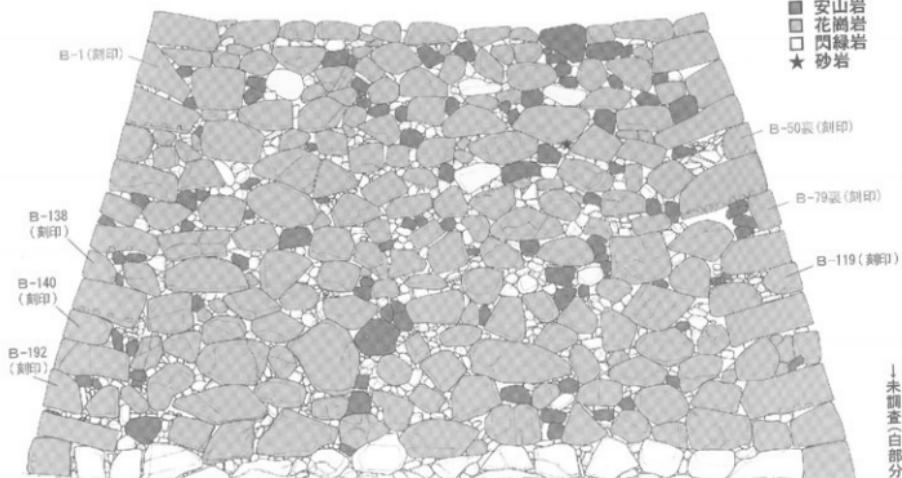




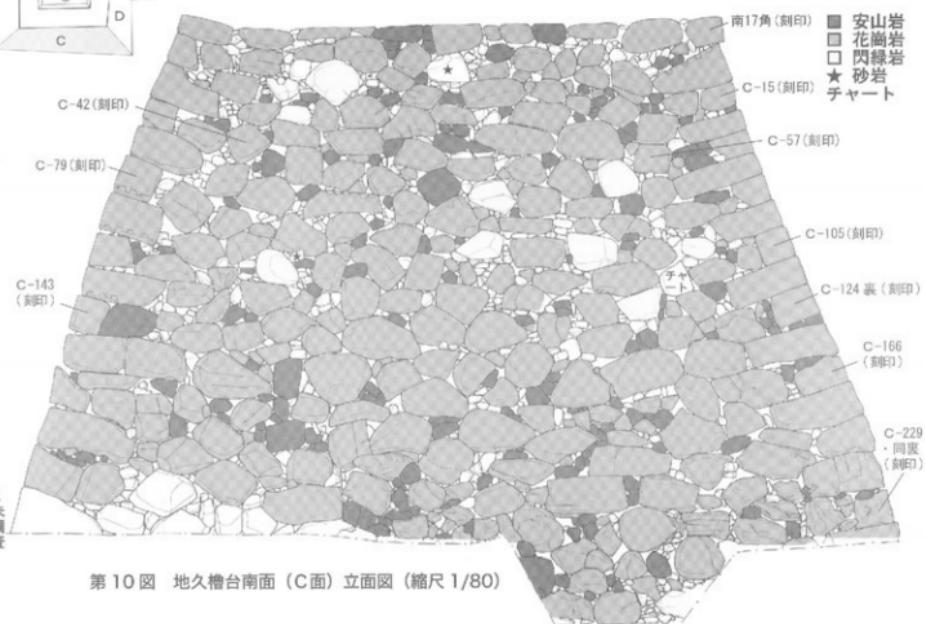
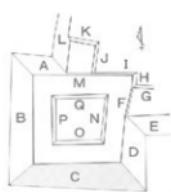
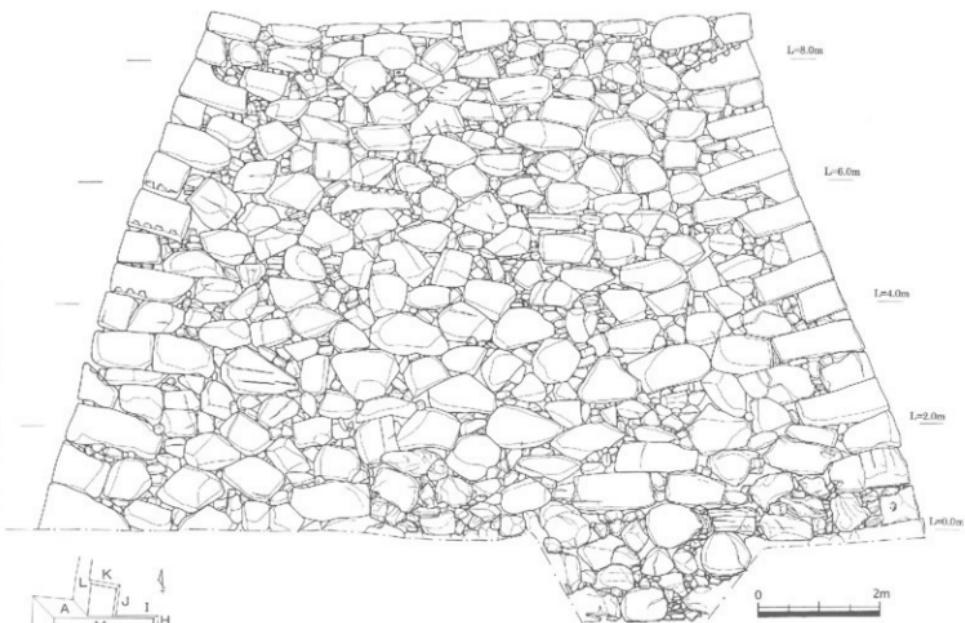
第8図 地久櫓台北面（A・M・I面）立面図（縮尺1/80）



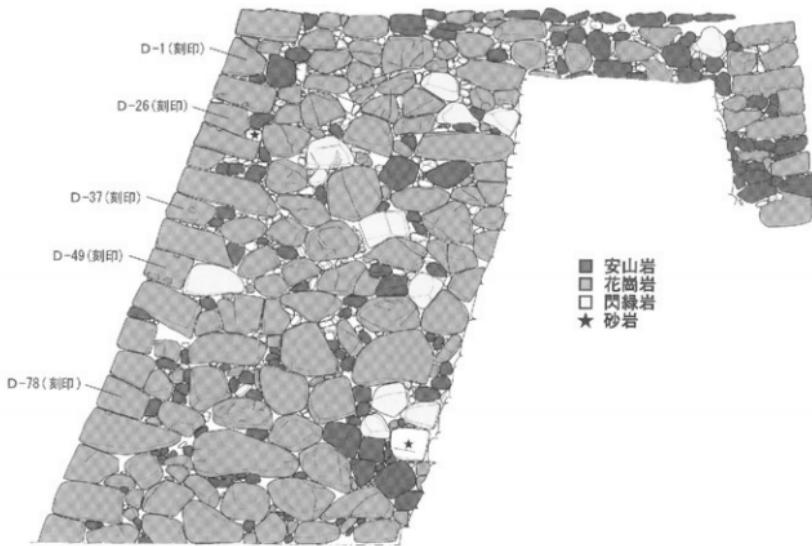
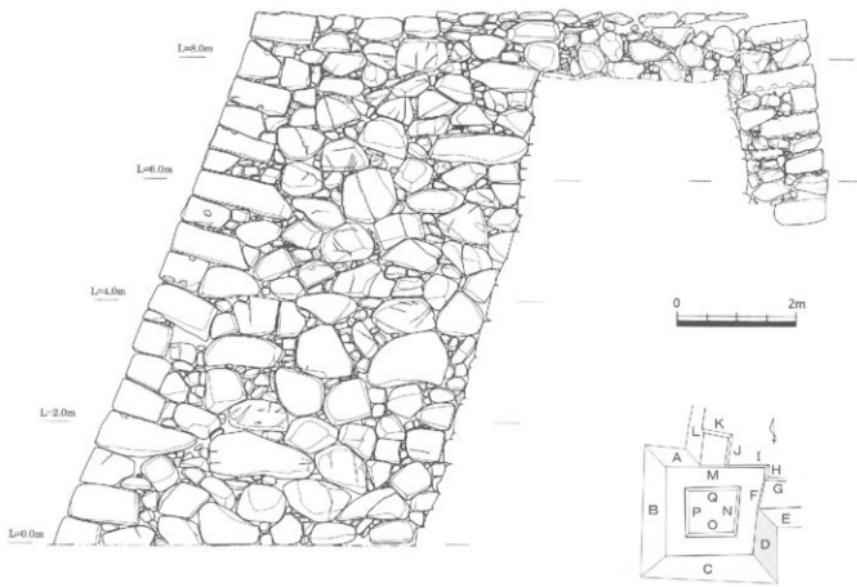
0 2m



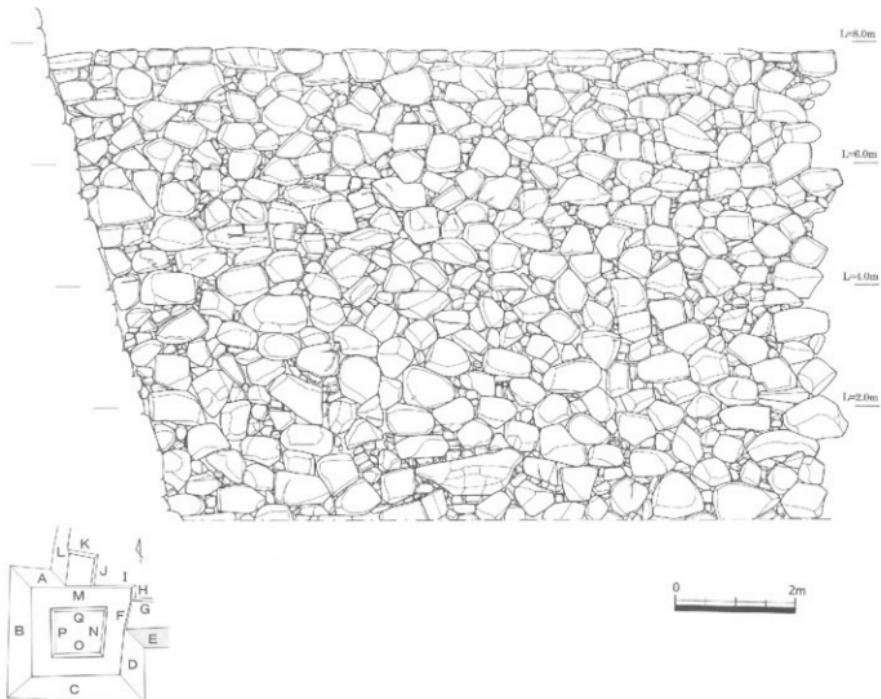
第9図 地久檜台西面（B面）立面図（縮尺1/80）



第10図 地久櫓台南面（C面）立面図（縮尺1/80）

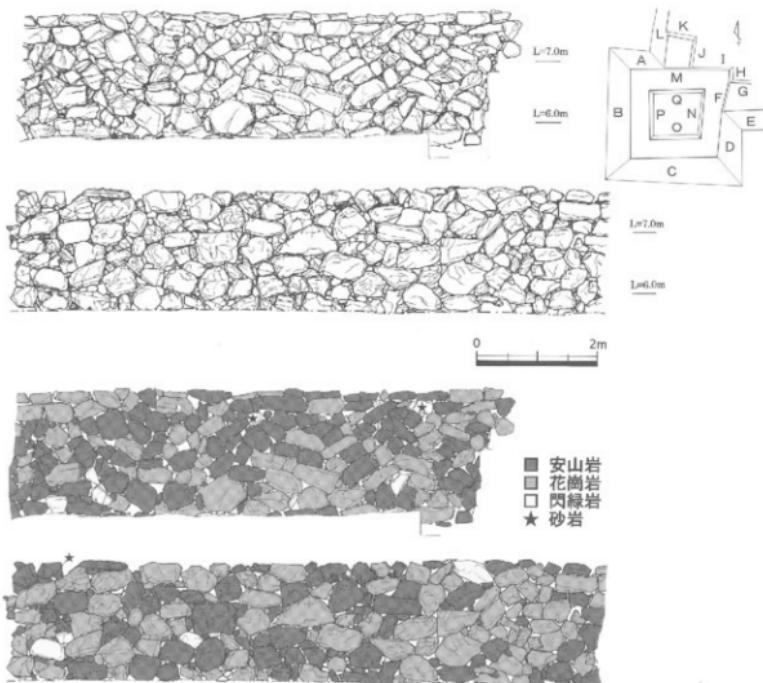


第11図 地久櫓台東面（D・F・H面）立面図（縮尺1/80）

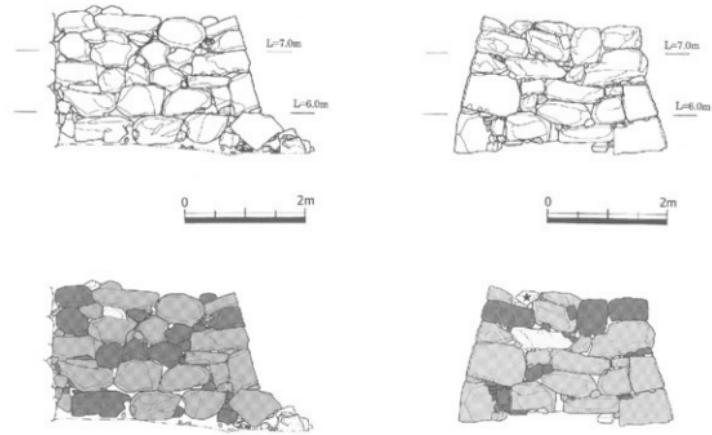


■ 安山岩
□ 花崗岩
□ 閃綠岩
★ 砂岩
☆ 斑レイ岩

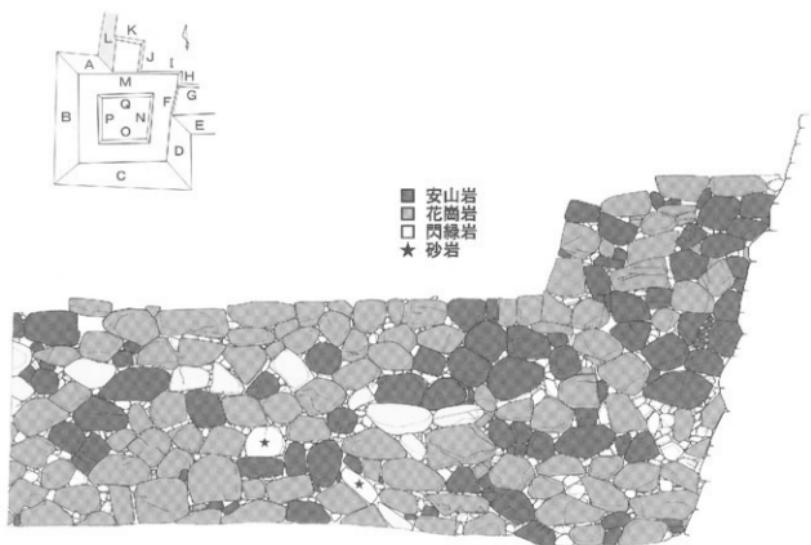
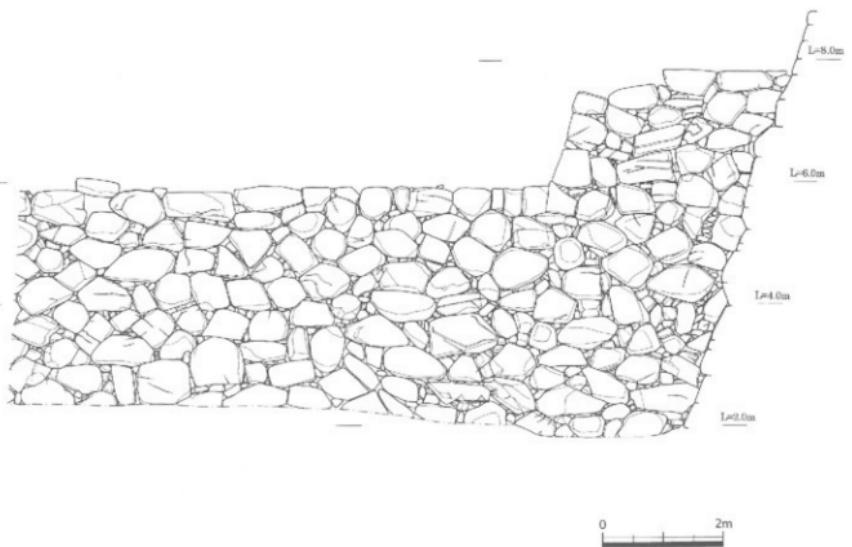
第 12 図 南土壠台南面 (E面) 立面図 (縮尺 1/80)



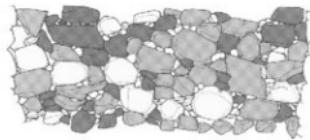
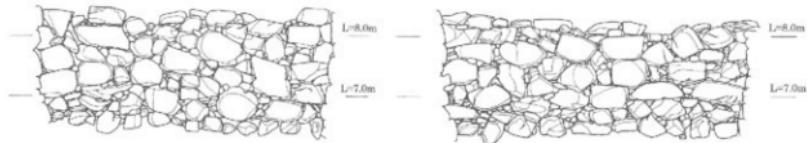
第13図 南土塀台北面（G面）立面図（縮尺1/80）



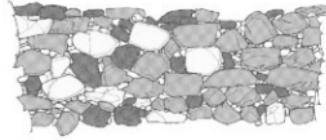
第14図 西土塀台東面（J面）立面図（縮尺1/80） 第15図 西土塀台北面（K面）立面図（縮尺1/80）



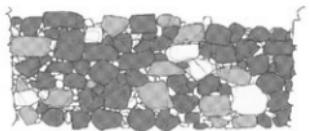
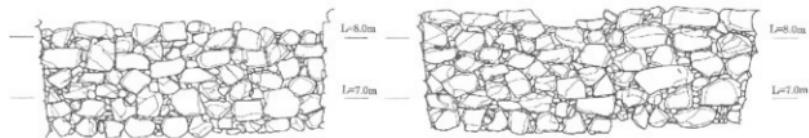
第16図 西土壠台西面（L面）立面図（縮尺1/80）



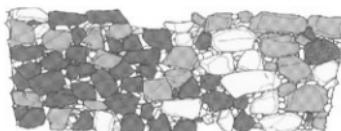
東壁（N面）



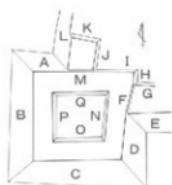
南壁（O面）



西壁（P面）



北壁（Q面）



■ 安山岩
□ 花崗岩
□ 閃綠岩

0 2m

第 17 図 橋台地下室壁面（N・O・P・Q面）立面図（縮尺 1/80）

【石垣の石材と積み方】

石垣に使用されている石材は、第1表のとおりで、総体的には安山岩と花崗岩が94%以上を占める。これは、高松平野および周辺の山塊において、安山岩や花崗岩が分布していることに起因するものと考えられる。石材は摩滅しているものが見られ、河口や海岸より入手した可能性がある。実際、海の貝が付着した痕跡が認められ、普段海水と接しない地下室の石垣にも海の貝が付着している。堀にあつた石垣の石を再利用した可能性も否定できないが、高松近辺の海岸では安山岩・花崗岩の塊石を今でも見られることから、近くの海岸から高松城に運び込んだ可能性がある(註1)。

積み方は、野面石(自然石)または粗削りした石材を使用した乱積みである。このため、石材と石材の間に間詰め石が多く見られるが、それでも石材間に大きな空間が認められる例がある。また、花崗岩の場合、粗削りは矢穴を使って削っている。

隅角石は、すべて花崗岩で、矢穴で割られている石材が多く、直方体に整形されている。この直方体を交互に積み重ねて、稜線を作り出している。

一方、根石については、南面(C面)中央で調査を実施している。根石は、上の石垣より半石分ほど外へ突出した状態で並べられている。また、根石は、基盤である砂礫の上に、若干のグリ石を下に敷いた状態で直接置かれており、胴木等の構造物は存在しなかった。

註1 川村敦一氏の教示による

地久櫓台石垣石材一覧表

	安山岩	花崗岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明	合 計	安山岩	花崗岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明
A・M・I面	171	135	10	3	0	0	319	53.6%	42.3%	3.1%	0.9%	0.0%	0.0%
B面	102	195	6	1	0	15	319	32.0%	61.1%	1.9%	0.3%	0.0%	4.7%
C面	184	262	18	2	1	7	474	38.8%	55.3%	3.8%	0.4%	0.2%	1.5%
D・F・H面	141	147	14	2	0	0	394	46.4%	48.4%	4.6%	0.7%	0.0%	0.0%
合 計	598	739	48	8	1	22	1,416	42.2%	52.2%	3.4%	0.6%	0.1%	1.6%
腐石重複分	5	53	0	0	0	0	58						
修正合計	593	686	48	8	1	22	1,358	43.7%	50.5%	3.5%	0.6%	0.1%	1.6%

南土堀跡石垣石材一覧表

	安山岩	花崗岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明	合 計	安山岩	花崗岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明
E面	262	232	20	1	0	2	517	50.7%	44.9%	3.9%	0.2%	0.0%	0.4%
G面	270	181	8	3	0	0	462	58.4%	39.2%	1.7%	0.6%	0.0%	0.0%
合 計	532	413	28	4	0	2	979	54.3%	42.2%	2.9%	0.4%	0.0%	0.2%

西土堀跡石垣石材一覧表

	安山岩	花崗岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明	合 計	安山岩	花崗岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明
J面	30	29	1	0	0	0	60	50.0%	48.3%	1.7%	0.0%	0.0%	0.0%
K面	22	24	1	1	0	0	46	45.8%	50.0%	2.1%	2.1%	0.0%	0.0%
L面	114	98	12	2	0	0	226	50.4%	43.4%	5.3%	0.9%	0.0%	0.0%
合 計	166	151	14	3	0	0	334	49.7%	45.2%	4.2%	0.9%	0.0%	0.0%

地久櫓台地下室石垣石材一覧表

	安山岩	花崗岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明	合 計	安山岩	花崗岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明
N面	36	33	12	0	0	0	81	44.1%	40.7%	14.8%	0.0%	0.0%	0.0%
O面	42	25	9	0	0	0	76	55.3%	32.9%	11.8%	0.0%	0.0%	0.0%
P面	14	59	6	0	0	0	79	17.7%	74.7%	7.6%	0.0%	0.0%	0.0%
Q面	23	39	15	0	0	0	77	29.9%	50.6%	19.5%	0.0%	0.0%	0.0%
合 計	115	156	42	0	0	0	313	36.7%	49.8%	13.4%	0.0%	0.0%	0.0%

	安山岩	花崗岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明	合 計	安山岩	花崗岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明
総合計	1,406	1,406	132	15	1	24	2,984	47.1%	47.1%	4.4%	0.5%	0.0%	0.8%

第1表 地久櫓台および南・西土堀跡石垣石材一覧表

【石垣の刻印】

地久櫓台石垣に見られる刻印は、平成15年度調査段階で第2表のとおり33石・36カ所である。刻印石の石材はすべて花崗岩であるが、これは刻印を施すのに花崗岩がもっとも適しているためである。また、櫓台における刻印石の位置は、隅角石が33石中30石と約9割を占める。これは、隅角石はすべて花崗岩で、なおかつ隅角石に使っている花崗岩は丁寧に直方体に加工されたもので刻印を施されやすい条件にあったとも考えられるが、櫓台の隅角石にこれだけ集中していることは何らかの意図が考えられる。また、直方体のうち短辺側の面に、刻印を施す場合が多い。

刻印の種類は、「上」がもっとも多く、次いで「□」と分銅形が並び、「⊗」、「○×」と続く。「ちり」と読めるものもある。

石番号	位置	刻印1	刻印2	備考	隅石の別番号
A-11	隅石	□		長方形	B-30
A-21裏	隅石	上			B-68裏
A-29裏	隅石	上	上		B-115裏
A-30裏	隅石	上			B-116裏
A-36	隅石	上			B-117
A-55	隅石	□		長方形	B-175
A-59東側面	中央	○×			
A-71	隅石	分銅形			B-193
B-1	隅石	⊗			A-1
B-50裏	隅石	半円形		○が半分欠落?	C-45裏
B-79裏	隅石	⊗			C-87裏
B-119	隅石	⊗			C-137
B-138	隅石	□		長方形	A-51
B-140	隅石	分銅形			A-54
B-192	隅石	分銅形			A-65
C-南17角	隅石	□		長方形	D-東1角
C-15	隅石	分銅形			D-25
C-42	中央	上			
C-57	中央	上			
C-79	隅石	上			B-78
C-105	隅石	□		長方形	D-42
C-124裏	隅石	上	上		D-51裏
C-143	隅石	⊗			B-151
C-166	隅石	□		長方形	D-77
C-229	隅石	⊗			D-90
C-229裏	隅石	⊗			D-90裏
D-1	隅石	○×			C-14
D-26	隅石	分銅形			C-34
D-37	隅石	○×			C-63
D-49	隅石	□	ちり	長方形	C-106
D-78	隅石	○×			C-167
I-1	隅石	分銅形			H-1
I-18	隅石	分銅形			H-6

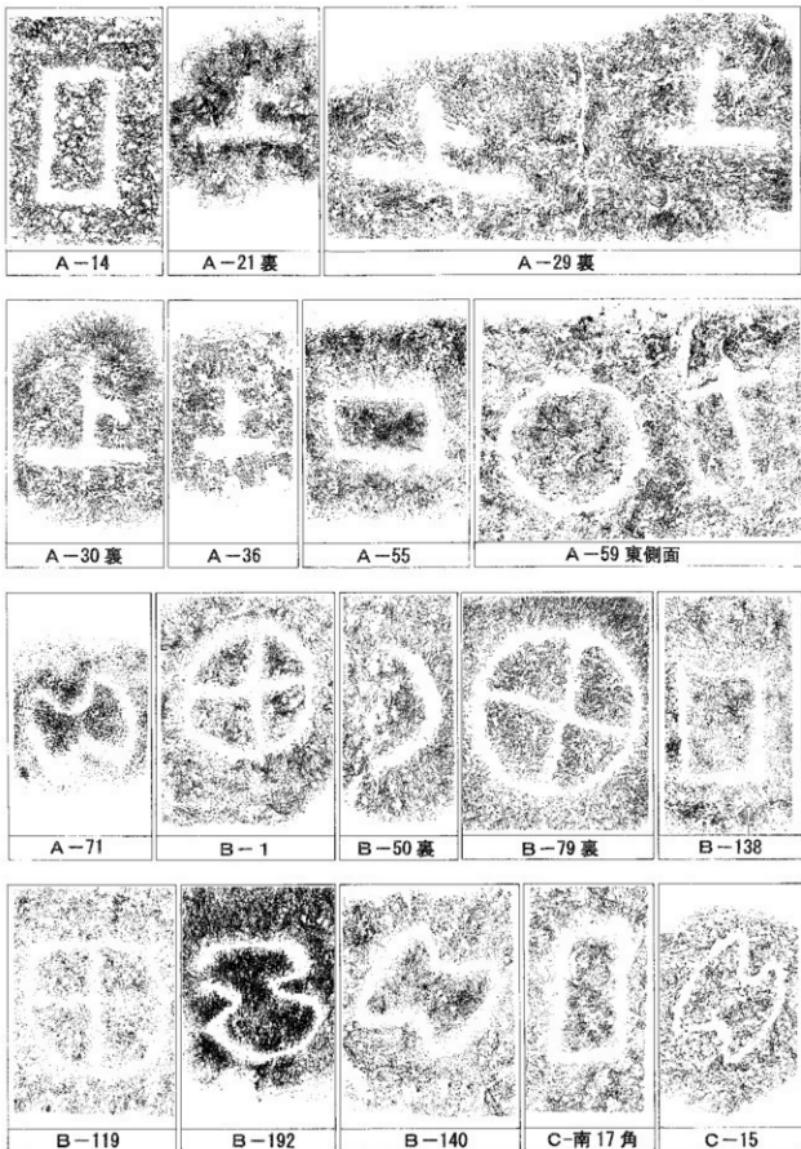
刻印石合計 33石

※刻印石の石材は、すべて花崗岩

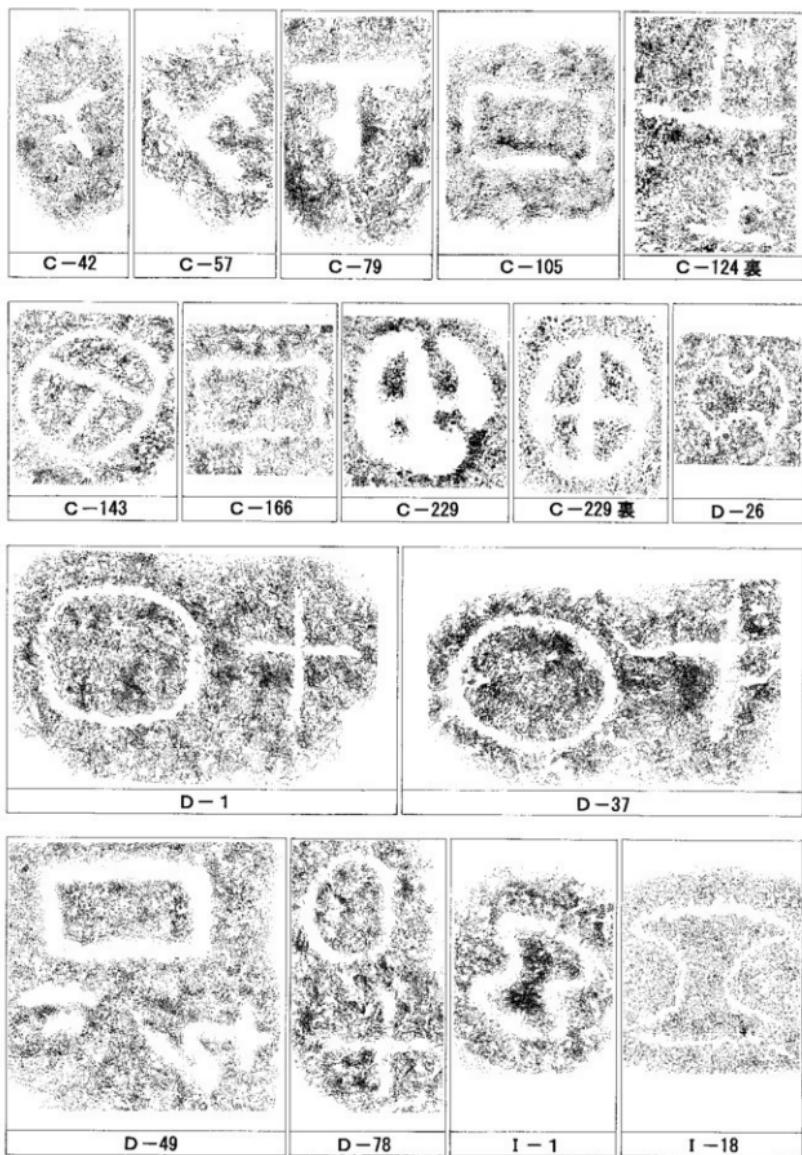
刻印種別個数	個数	割合
上	10ヶ所	27.8%
□	7ヶ所	19.4%
分銅形	7ヶ所	20.0%
⊗	6ヶ所	16.7%
○×	4ヶ所	11.1%
半円形	1ヶ所	2.8%
ちり	1ヶ所	2.8%
合計	36ヶ所	80.6%

刻印石位置別個数	個数	割合
隅石	30石	90.9%
中央	3石	9.1%
合計	33石	100.0%

第2表 地久櫓台石垣刻印一覧表



第18図 地久檜台石垣刻印拓本①（縮尺1/4、原則として拓本と刻印石の上方向がほぼ一致）



第 19 図 地久檜台石垣刻印拓本②（縮尺 1/4、原則として拓本と刻印石の上方向がほぼ一致）

第2節 地久櫓台・本丸南土壠台からの出土遺物

地久櫓台および本丸南土壠台を構成している盛土・グリ石層中から、工事立会中に遺物が出土している。本節では、各土層より出土した遺物について報告する。

【地久櫓台 第54層】

地久櫓台内部の盛土中、最下層近くにあたる第54層から出土した遺物である(第20図)。1は備前焼鉢の底部で、内面に擗目が見られる。2は備前焼甕の口縁部で、15世紀頃のものである。3は土師質の土鍤で、中央に紐通しの穴が見られる。

【地久櫓台 第51層】

第54層より上部に位置するが、地久櫓台盛土の最下層近くにあたり、この土層から出土した遺物である(第21図)。4は中国産青磁蓮弁文碗の底部で、外側に細線蓮弁文が縦線で表現され、内面見込には「福」の旧字を中心に草花文が丸くめぐっている。外面高台内において釉を環状に掻き取っている。15世紀後葉～16世紀前葉のものである。5も中国産青磁碗の細片で、無紋である。6は中国産青磁で鉢の口縁部と考えられる。7は磁器青花皿で、中国漳州窯系の製品であり、16世紀末～17世紀初頭のものである。8は土師質土器擗鉢の底部で、内面に擗目が見られる。9は備前焼鉢の底部で、これも内面に擗目が見られる。10は土師質上器だが、器種は不明である。11は備前焼甕の底部である。12は連珠文を瓦当文様とする軒半瓦である。連珠文は小振りで、連珠文の外側に團線がめぐる。瓦当上縁を面取りし、瓦当部の接合方法は顎貼り付けの可能性がある。13～14世紀のものと考えられる。

【地久櫓台 盛土層】

出土した層位は不明だが、地久櫓台盛土下部(第37層以下)より出土した遺物である(第22・23図)。13は中国産白磁碗の玉縁がつく口縁部で、12世紀以降のものである。14は中国産青磁碗の口縁部で、無紋である。15は唐津産陶器の皿で、九州近世陶磁学会編年の一～二期にあたることから17世紀初頭のものである。16～18は備前焼鉢である。16は口縁から底部までが残っている破片で、16世紀末頃のものである。17は口縁部で、15世紀中葉頃のものである。18は底部で、内面に擗目が見られる。19も備前焼で、壺または甕の底部と考えられる。20は備前焼甕の口縁部で、15世紀頃のものである。21は須恵器甕の頭部で、外側には格子目叩き痕が残る。22も須恵器甕の頭部で、外側には格子目叩き痕が残り、焼成は瓦質である。21・22とも備中龜山焼の可能性があり、12世紀頃のものである。23は瓦罈甕の底部で、和泉型の可能性がある。24は土師質上器皿である。25～27は土師質土器皿で、25・26の底面には回転糸切の痕跡が残る。28は土師質土器擗鉢の底部で、内面に擗目が見られる。29は土師質土器皿の口縁部で、外側鋸歯以下に焼が付着している。16世紀頃のものである。30は土師質土器皿の脚部と考えられる。31は土師質土器だが、器種は不明である。32は土師質の土鍤で、楕円形の周囲に紐を結ぶための溝が見られる。33は弥生土器小形丸底土器の底部で、弥生時代後期後半のものである。34・35は弥生土器高杯の脚部で、弥生時代後期のものである。36・37は弥生土器の底部で、弥生時代後期のものである。38は須恵器甕の体部で、円孔が見られ、古墳時代後期のものである。39は須恵器台の脚部と考えられ、古墳時代後期のものである。40は須恵器甕の底部である。41は鉄滓である。42は三巴文を瓦当文様にもつ軒丸瓦で、外区の珠文間は狭い。粘土板切断方法がコピキAであることから、16世紀末までのものと考えられる。43～45は土師質の玉縁式丸瓦で、45は2次的に被熱している。46は土師質の平瓦で、全体の半分ほどが残る。凸面に粗い縫叩き痕が見られる。

【地久櫓台 盛土・グリ石層】

地久櫓台盛土下部または石垣裏込のグリ石層より出土した遺物である(第24図)。工事立会中の出土で、どちらから出土したか判別できないものである。なお、グリ石層には、石垣の隙間から入り

込んだ新しい時期の遺物が混じっている。47は肥前系染付碗の底部で、17世紀中葉までのものである。48・49は肥前系染付碗の口縁部で、18世紀末～19世紀のものである。50は肥前系染付碗の底部で、17世紀中～後葉のものである。51は瀬戸美濃系大口茶碗の底部で、16世紀頃のものである。52は、4と同じ中国産青磁蓮弁文碗の体部で、外面に細縁蓮弁文が縦線で表現され、15世紀後葉～16世紀前葉のものである。53は瀬戸美濃系丸碗で、17世紀中頃までのものである。54は产地不明の陶器鉢である。55・56は備前焼壺鉢の口縁部で、55は16世紀前半頃のもの、56は17世紀頃のものである。57は備前焼甕の口縁部で、15世紀頃のものである。58・59は土師質上器杯で、底面には静止系条の痕跡が残る。60は土師器の把手と考えられる。61は土師質十器壺鉢の口縁部で、内面に屈目が見られるとともに、煤が付着している。口縁部が内側に折れ曲がることから、16世紀後葉～17世紀前葉のものと考えられる。62は土師質土器耳付釜の口縁部で、外側以下に煤が付着している。16世紀後葉～17世紀前葉のものと考えられる。63は土師質土器釜の脚部と考えられ、2次的に被熱している。64は弥生土器高杯の脚部で、弥生時代後期のものである。65は三巴文を瓦当文様にもつ軒丸瓦で、瓦当直径が14.4cmと小型である。66も三巴文を瓦当文様にもつ軒丸瓦だが、文様は外区の珠文のみ残っている。67は玉縁式の丸瓦である。68は軒平瓦で、中心飾りは三葉文と考えられ、2次的に被熱している。16～17世紀のものであると考えられる。

【地久櫓台 グリ石層】

地久櫓台石垣裏込のグリ石層より出土した遺物である(第25・26図)。このグリ石層には、石垣の隙間から入り込んだ新しい時期の遺物が混じっている。69は中国産青磁碗の体部で、2次的に被熱している。70・71は備前焼壺鉢の底部で、内面に瘤目が見られる。70は2次的に被熱している。72は土師質十器飯碗壺で、鉢形の身に紐通しの孔をもつ把手が上部につく。73は三巴文を瓦当文様にもつ軒丸瓦で、巴の尾が長く、内区と外区を分ける縞線が見られる。瓦当直径が14.3cmと小型である。15～16世紀頃のものである。74も三巴文を瓦当文様にもつ軒丸瓦だが、巴の尾は短い。瓦当直径が14.0cmと小型である。75・76は玉縁式の丸瓦である。76は2次的に被熱し、変形している。77は行基式の丸瓦である。78も丸瓦の破片で、釘穴が中央に1ヶ所見られる。79はバチ形をした用途不明の瓦である。80は五輪塔火輪で、頂部にはぞ穴が穿たれている。比較的原型をよく留め、全面に鑿痕が残されている。石材は、高松平野出七例では珍しい花崗岩で、15世紀後半頃のものである。81は五輪塔水輪で、80同様に花崗岩であるが、風化が著しいためか疊が目立つ。

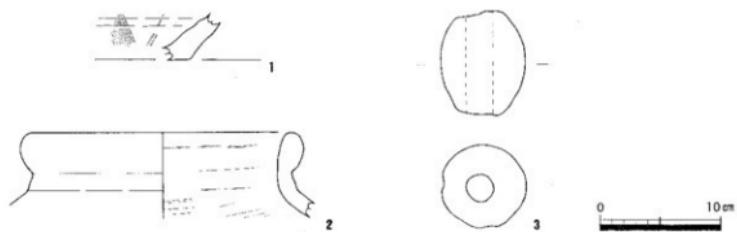
【本丸南土堀台 グリ石層】

本丸南土堀台石垣裏込のグリ石層より出土した遺物である(第27図)。土堀台内側の石垣(G面)は、その積み方より近代に積み直されたものと推測される。82は備前焼壺鉢の底部で、内面に瘤目が見られる。外側に煤が付着している。83は土師質の土鍤で、楕円形の周囲に紐を結ぶための溝が見られる。84は中国明錢である永樂通宝である。初鋤が1408年であり、これ以降のものである。85は玉縁式の丸瓦である。

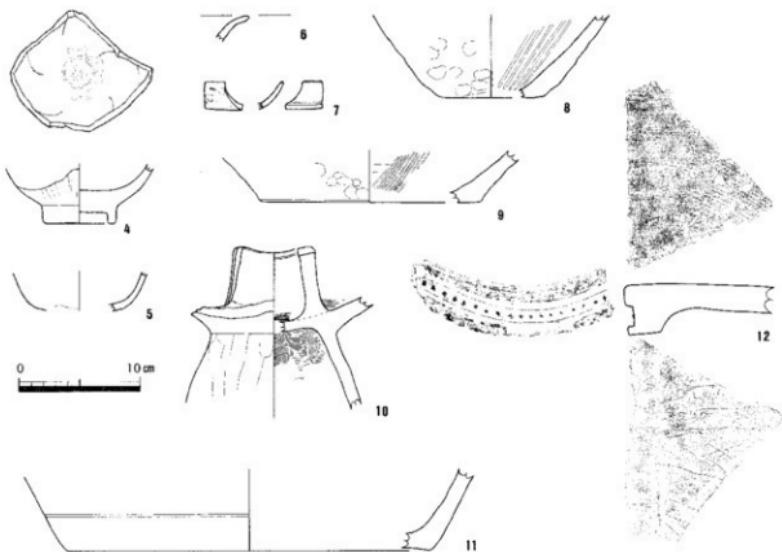
参考文献

- 伊藤亮 1997 「窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館
市本芳三 1995 「瓦」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」
編津一郎 1995 「十四～十六世紀の貿易陶磁」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
佐藤竜馬 1995 「四分寺輪舟遺跡」香川県教育委員会
佐藤竜馬 2003 「高松城跡(西の丸町地区) II」香川県教育委員会ほか
乗岡火 2000 「中近世の備前焼壺鉢の編年案」『第3回中近世備前焼研究会』
乗松直也 2004 「浜町遺跡」香川県教育委員会ほか
藤沢良祐 1993 「瀬戸・美濃大窯の編年」『瀬戸市史』陶磁史篇4
間壁忠彦・間壁茂子 1966～68・84 「備前焼研究ノート」1～4『食歴考古館研究集報』1・2・5・18号
間壁忠彦 1991 「考古学ライブラリー 60 「備前焼」ニュー・サイエンス社

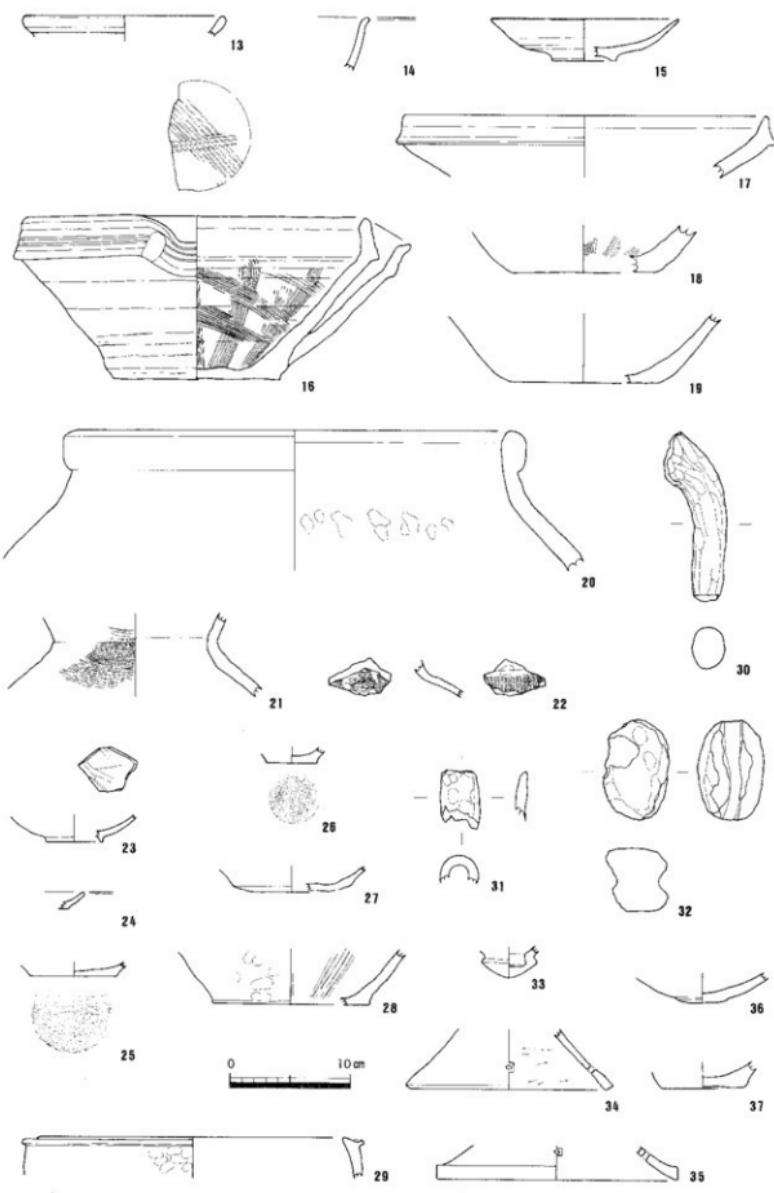
- 森村健一 1995 「福建省漳州窯系青花・五彩・珊瑚地の編年」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3
 山崎信二 2000 「中世瓦の研究」雄山閣出版
 横田賛次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4



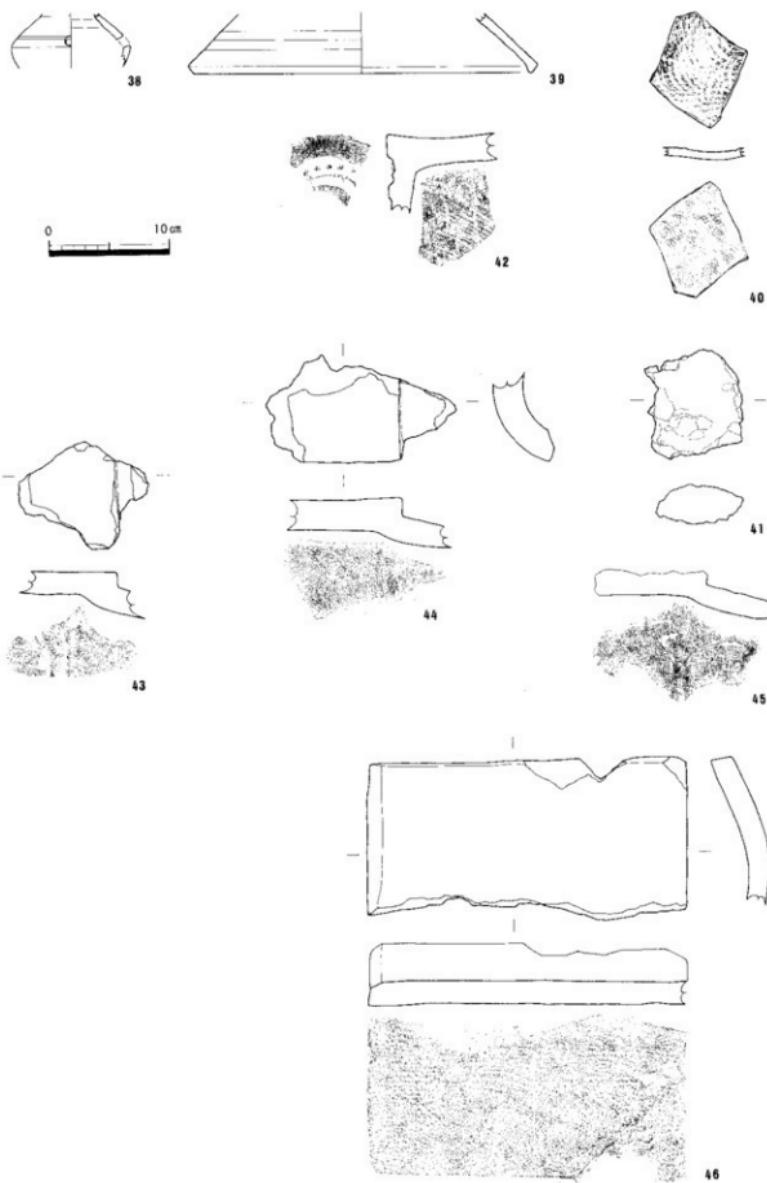
第20図 地久櫓台第54層出土遺物実測図（縮尺1/4）



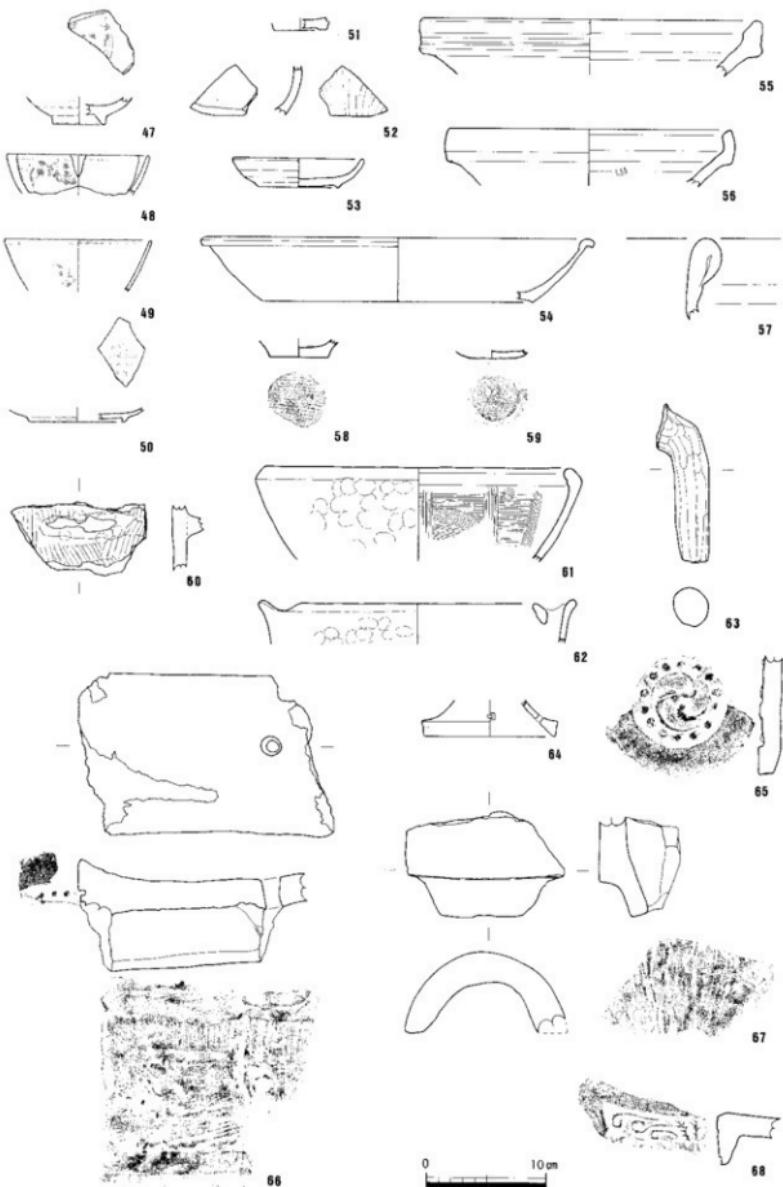
第21図 地久櫓台第51層出土遺物実測図（縮尺1/4）



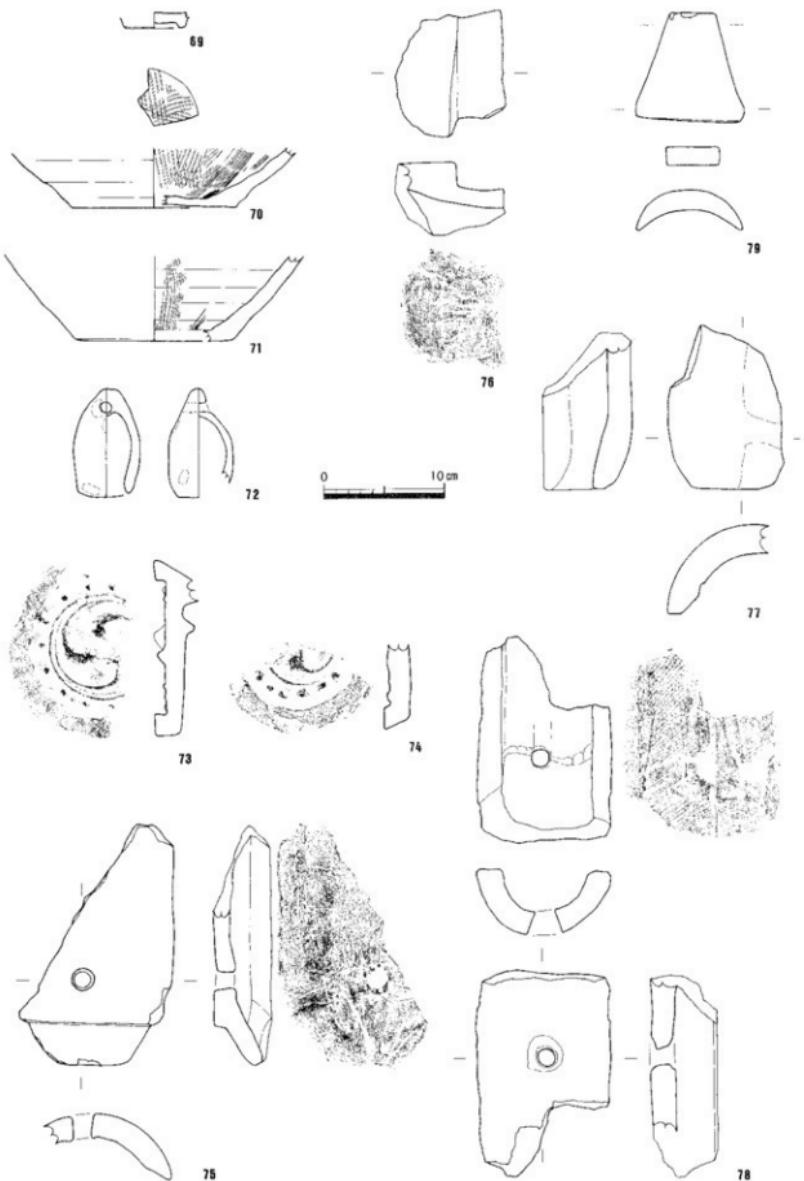
第22図 地久樋台盛土層出土遺物実測図① (縮尺1/4)



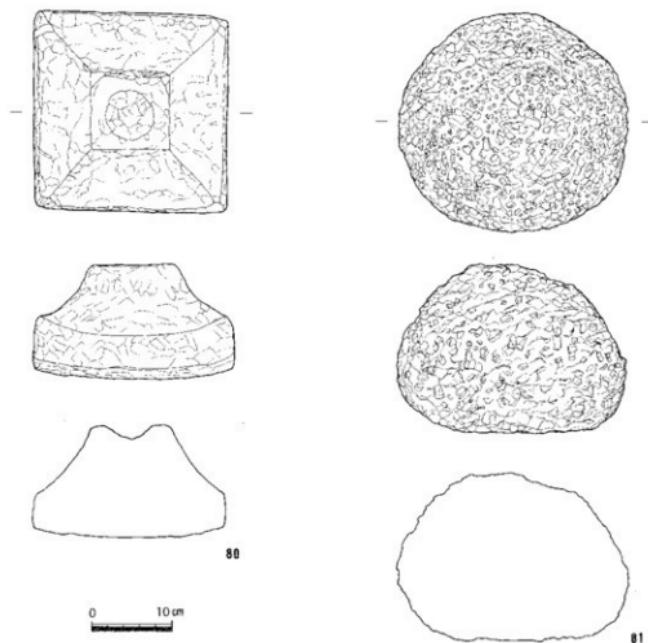
第23図 地久櫓台盛土層出土遺物実測図②（縮尺 1/4）



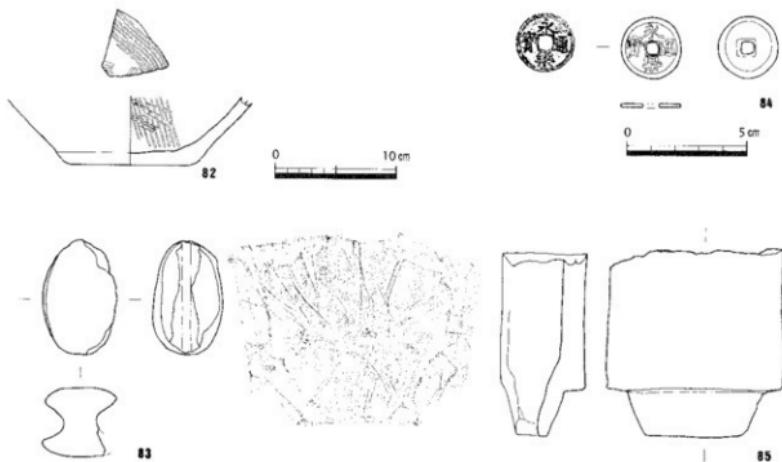
第24図 地久橋台盛土・グリ石層出土遺物実測図（縮尺1/4）



第25図 地久檜台グリ石層出土遺物実測図① (縮尺1/4)



第26図 地久捨台グリ石層出土遺物実測図②(縮尺1/6)



第27図 本丸南土壙台グリ石層出土遺物実測図(縮尺1/4, ただし84は1/2)

出物番号	学名	重量(g)	品目	類型	色調	尺寸	備考
1	蘭科	(3.8)	内面:薄葉 外側:厚葉	角面:ナデ 内面:薄葉	外面:灰N4/ 内面:灰N3/	素	
2	蘭科	21.6	(7.1)	内面:厚葉ナデ 外側:薄葉ナデ	外面:灰N3-5VR6/2 内面:灰N2-5VS6/2	素	内面:自然縮り書
3	土瓶	灰さ 7.0	333.9g	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰N2-5VR6/3 内面:灰N2-5VS6/3	3mm以上の石英・長石 を含む	
4	青磁	5.6	(5.0)	内面:薄葉ナデ 外側:薄葉	内面:灰N2-5VR6/2 外側:薄葉	素	質地:灰白のV8/1
5	青磁	(3.3)	内面:薄葉ナデ、縦折(芯部は露む)	内面:灰N2-5VR6/2 外側:薄葉	内面:灰N2-5VR6/2 外側:薄葉	素	
6	青磁	(2.2)	内面:薄葉	内面:薄葉	内面:灰N2-5VR6/1 外側:灰N2-5VS6/1	素	
7	青磁	(2.3)	外面:薄葉	内面:薄葉	内面:灰N2-5VR6/2 外側:灰白SVR8/2	素	
8	「唐寶」器 盤	8.6	(6.9)	内面:ナデ、薄葉直彌 外側:白地ナデ、直彌	外面:灰N2-5VR6/6 内面:灰N2-5VR6/1	2mm以上の石英・長石 を含む	
9	青磁	18.0	(4.0)	内面:薄葉ナデ 外側:白地	内面:灰N2-5VR6/1 外側:白地	素	
10	「唐寶」器 不明	(13.5)	内面:ナデ 外側:白地	外側:灰N2-5VR6/4 内面:灰N2-5VR6/4	1mm以下の石英・長石 を含む	素	
11	編織機 残	30.0	(6.0)	内面:ナデ 外側:ナデ	外側:灰N2-5VR6/1 内面:灰N2-5VR6/1	素	
12	牛糞瓦	灰さ 2.1	内面:ナデ 外側:薄葉	内面:灰N4/ 外側:灰N4/	素	深穴1個(既状)	
13	当物 瓶	16.4	(1.7)	内面:薄葉ナデ 外側:薄葉	内面:灰N2-5VR6/1 外側:灰白V8/1	素	
14	青磁			内面:薄葉 外側:薄葉	内面:灰N2-5VR6/1 外側:灰N2-5VR6/1	素	
15	青磁	18.4	5.2	3.5 内面:薄葉ナデ、縦折(体部下半に露む)	内面:灰N2-5VR6/2 外側:灰白SVR8/2	素	
16	青磁	28.0	14.0	13.4 内面:薄葉ナデ 外側:白地ナデ	内面:灰N2-5VR6/1 外側:白地	素	
17	編織機 残	30.0	(5.1)	内面:薄葉ナデ 外側:白地ナデ	内面:灰N2-5VR6/6 外側:白地	素	
18	鶴形地 殘	11.9	(1.0)	内面:薄葉ナデ 外側:白地、昇日	内面:灰N2-5VR6/1 外側:灰N2-5VR6/1	素	
19	鶴形地 殘	12.2	(5.7)	内面:薄葉ナデ 外側:白地、昇日	内面:灰N2-5VR6/3 外側:灰N2-5VR6/3	素	
20	鶴形地 殘	36.0	(11.5)	内面:薄葉ナデ 外側:白地ナデ	内面:灰N2-5VR6/2 外側:灰白SVR8/4/2	素	
21	承物 器	(7.0)		内面:格子目日字模 外側:ナデ	内面:灰N4/ 外側:灰N4/	素	
22	承物 器	(3.0)		内面:指捺模ナデ、アラ、格子目日字模 外側:ナデ、刻毛、西面直彌	内面:灰N4/ 外側:灰白SVR8/3	素	
23	瓦	4.7	(2.3)	内面:ナデ 外側:ナデ	内面:灰N4/ 外側:灰N4/	素	
24	土器	(1.4)		内面:白地ナデ 外側:白地ナデ	内面:灰N2-5VR6/9 外側:灰N2-5VR6/9	1mm以下の石英・長石 を含む	
25	土器	7.0	(1.2)	内面:白地ナデ、正反水印、アラ 外側:白地ナデ	内面:灰N2-5VR6/4 外側:灰N2-5VR6/6	1mm以下の石英・長石 を含む	
26	土器	4.7	(1.0)	内面:白地ナデ 外側:白地ナデ	内面:灰N2-5VR6/8 外側:灰N2-5VR6/8	1mm以下の石英・長石 を含む	
27	土器	9.6	(2.1)	内面:白地ナデ 外側:白地ナデ	内面:灰N2-5VR6/8 外側:灰N2-5VR6/8	1mm以下の石英・長石 を含む	
28	土器	12.5	(1.6)	内面:白地ナデ、升日 外側:ナデ、昇日	内面:灰N2-5VR6/3 外側:灰N2-5VR6/3	1mm以下の石英・長石 を含む	
29	土器	25.0	(3.4)	内面:白地ナデ 外側:ナデ	内面:灰N2-5VR6/4 外側:灰N2-5VR6/4	2mm以上の石英・長 石・黄鐵矿・雲母を含 む	外側面以下に擦り痕
30	土器	(14.0)		内面:ナデ 外側:ナデ	内面:灰N2-5VR6/4 外側:ナデ	2mm以下の石英・長 石・黄鐵矿・雲母を含 む	
31	土器	灰さ 1.8	2.2	内面:ナデ、縦折(裏 内面:ナデ)	内面:灰N2-5VR6/6 外側:灰N2-5VR6/6	1mm以下の石英・長 石・黄鐵矿・雲母を含 む	
32	土器	灰さ 2.6	5.2	5.5 内面:ナデ、横折直彌	内面:灰N2-5VR6/6	2mm以上の石英・長 石・黄鐵矿・雲母を含 む	重207.5g
33	「牛」 瓦	7.0	(2.0)	内面:ナデ 外側:ナデ	内面:灰N2-5VR6/1 外側:灰N2-5VR6/1	1mm以下の石英・長 石・黄鐵矿・雲母を含 む	
34	「牛」 瓦	16.1	(5.0)	内面:薄断面ナメ 外側:ナメ	内面:薄断面N1/V6/6 外側:灰N2-5VR6/6	1mm以下の石英・長 石・黄鐵矿・雲母を含 む	身記:牛丸1.5t(既状)
35	「牛」 瓦	19.8	(7.0)	内面:薄断面ナメ 外側:ナメ	内面:薄断面N1/V6/6 外側:灰N2-5VR6/5	1mm以下の石英・長 石・黄鐵矿・雲母を含 む	身記:牛丸1.5t(既状)
36	「牛」 瓦	4.2	(2.5)	内面:薄断面ナメ 外側:ナメ	内面:薄断面N1/V6/1 外側:灰N2-5VR6/1	1mm以下の石英・長 石・黄鐵矿・雲母を含 む	外蓋無
37	「牛」 瓦	6.7		内面:薄断面ナメ 外側:ナメ	内面:薄断面N1/V6/6 外側:灰N2-5VR6/5	1mm以下の石英・長 石・黄鐵矿・雲母を含 む	外蓋無
38	「牛」 瓦	(4.6)		内面:薄断面 外側:ナメ	内面:灰N4/ 外側:灰N4/	素	側面中央凹門孔1ヶ所
39	「牛」 瓦	27.8	(4.9)	内面:白地ナデ 外側:ナメ	内面:灰N4/ 外側:灰N4/	素	外蓋と自然離
40	「牛」 瓦	(1.0)		内面:白地ナメ 外側:ナメ	内面:灰N4/ 外側:灰N4/	素	
41	新評	灰さ 9.1	3.3	内面:ナデ 外側:ナデ	内面:灰N4/ 外側:灰N4/	1mm以下の石英を含む	内面灰 外側灰(既状)
42	新人瓦	灰さ 1.1	1.0	内面:ナデ 外側:ナデ	内面:灰N4/ 外側:灰N4/	1mm以下の石英を含む	
43	瓦	10.7	1.0	内面:白地、コヒニ 外側:白地	内面:灰N2-5VR6/3 外側:灰N2-5VR6/3	1mm以上の石英・長 石・黄鐵矿・雲母を含 む	
44	瓦	13.1	2.5	内面:ナデ 外側:白地、コヒニ	内面:灰N2-5VR6/8 外側:灰N2-5VR6/8	1mm以下の石英・長 石・黄鐵矿・雲母を含 む	
45	瓦	14.7		内面:ナデ 外側:白地	内面:灰N2-5VR6/4 外側:灰N2-5VR6/4	1mm以下の石英・長 石・黄鐵矿・雲母を含 む	2次の小被瓦
46	平瓦	26.8	1.9	内面:ナデ 外側:ナデ	内面:灰N2-5VR6/3 外側:灰N2-5VR6/3	1mm以下の石英・長 石・黄鐵矿・雲母を含 む	

第3表 地久櫓台・本丸南土堀台出土遺物観察表①

遺物 分類	器 物	寸 厘(cm)	調 査	色 質	地 土	備 考
47	漆付 筒形	4.2 (2.3)	外面:漆付、高台部付には漆無 内面:漆付	赤・青青灰色/1 墨/1	赤	
48	漆付 筒形	11.6 (3.3)	外面:漆付 内面:漆付	墨/1 墨/1	赤	
49	漆付 筒形	12.0 (4.2)	外面:漆付 内面:漆付	赤・深紅色/1 墨/1	赤	
50	漆付 筒形	7.8 (1.2)	外面:漆付 内面:漆付	赤・白/1 墨/1	赤	
51	大口茶碗	4.4 (4.2)	外面:凹輪アメ 内面:凹輪	緑/1 緑/1 墨/1 墨/1	赤	
52	青磁 碗			青/1 青/1	赤	
53	青磁 丸深	10.6 6.6	2.4 外面:凹輪アメ、施釉 内面:凹輪アメ、施釉	緑/1 緑/1 墨/1 墨/1	赤	
54	青磁	31.6	5.2 外面:凹輪アメ、施釉	青磁/1 青磁/1	赤	
55	青磁 盤	27.0 (4.0)	外面:凹輪アメ、施釉	青磁/1 青磁/1	赤	
56	青磁 盤	23.0 (4.7)	外面:凹輪アメ 内面:凹輪アメ、墨	青磁/1 青磁/1 墨/1	赤	
57	青磁 蓋	(6.0) 外面:凹輪アメ	外面:凹輪アメ 内面:凹輪アメ	青磁/1 青磁/1	赤	
58	上野青丁器 蓋	4.8 (1.5)	外面:凹輪アメ、静止系乳 内面:凹輪アメ、接触圧乳	青磁/1 青磁/1 墨/1 墨/1	1mm以下の不規・板石 1mm以下の不規・板石	
59	「伊賀」印 瓦	3.8 (0.8)	外面:凹輪アメ 内面:凹輪アメ	青磁/1 青磁/1	青磁/1 青磁/1	青磁/1 青磁/1
60	「伊賀」印 瓦	(5.6)	外か・長い刺突、アフ、折腰、墨 内面:凹輪アメ	1mm以下の不規・長 1mm以下の不規・墨		
61	「伊賀」土器 縁鉢	25.4 (7.0)	外か・アフ、斜傾斜底 内面:アフ、斜傾斜底、墨	2mm以下の不規・長 2mm以下の不規・墨	赤	「縁鉢」内面に採用者 名・印字
62	土器 筒形	9.4 (3.3)	外か・アフ、斜傾斜底 内面:アフ	1mm以下の不規・長 1mm以下の不規・墨	赤	「筒形」以下に採用者 名・印字
63	土器 筒形	13.0 外か・アメ	外か・アメ 内面:凹輪アメ	1mm以下の不規・長 1mm以下の不規・長	赤	2次的な被施
64	青磁 筒形	10.8 (3.0)	外面:厚底のため不規 内面:施釉のため不規	外底:青磁/1 内面:青磁/1 内面:10mm/4 内面:10mm/4	赤	脚部:J・孔1ヶ所(模様)
65	軽丸瓦	14.4 1.5	墨/1 墨/1	墨/1 墨/1	赤	三巴文 墨文14個
66	軽丸瓦	19.0 2.2	内面:ナメ 内面:ナメ、凹輪アメ、墨	内面:ナメ 内面:ナメ	赤	底文7個(模様)
67	丸瓦	9.7 2.5	内面:ナメ 内面:ナメ、墨	内面:ナメ 内面:墨10%/1	赤	
68	軽平瓦	7.8 1.7	内面:ナメ 内面:板ナメ	内面:青磁/2.5/1 内面:青磁/2.5/1	赤	一墨文、墨黒文・模 2次的な被施
69	青磁 碗	5.2 (1.0)	厚底(高台突出より側は無釉) 内面:墨	外底:青磁/7.5V7/1 内面:灰N/1	赤	2次的な被施
70	青磁 盤	13.6 (4.9)	外面:凹輪アメ 内面:凹輪アメ、墨	外底:青磁/5.5V4/1 内面:青磁/5.5V4/1	赤	2次的な被施
71	青磁 盤	13.0 (7.0)	内面:ナメ 内面:凹輪アメ	内底:青磁/5.5V2/2 内面:青磁/5.5V2/2	赤	
72	土器 筒形	4.0 内面:ナメ	外底:青磁/10mm/7/7 内面:ナメ	2mm以下の不規・長 1mm以下の墨/10mm/4 石・角端方を含む	赤	白細帯外間に基底
73	軽丸瓦	14.3 1.6	内面:ナメ 内面:板ナメ	内底:青磁/1 内面:板N/3/1	赤	三巴文 模文2種(模様) 墨文1種(模様)
74	軽丸瓦	15.0 2.1	墨/1 墨/1	内底:墨N/1 内底:墨N/1	赤	三巴文 模文2種(模様)
75	丸瓦	16.7 2.0	内面:ナメ 内面:ナメ	内底:墨N/1 内底:墨N/1	赤	底文7個(模様)
76	丸瓦	15.6 1.4	内面:ナメ 内面:板ナメ	内底:墨N/1 内底:板N/1	赤	2次的な被施
77	丸瓦	15.6 2.5	内面:ナメ 内面:墨/1 内面:墨/1、コピキア	内底:墨N/1 内底:墨N/1 内底:墨N/1	赤	
78	丸瓦	17.0 1.9	内面:墨/3 内面:板ナメ	内底:墨N/1 内底:墨N/1	赤	封穴1ヶ所
79	瓦	8.8 8.9 2.1	内面:ナメ 内面:ナメ 内面:ナメ	内底:墨N/1 内底:墨N/1 内底:墨N/1	赤	
80	五輪瓦 火薙	24.8 24.4 14.3	一边 内面:ナメ、高台、西面にはモテ 内面:墨/1 内面:墨/1			花捲巻
81	青磁 水盆	26.1 26.7	墨/1 墨/1			花瓶型
82	青磁 水盆	10.0 (5.7)	内面:凹輪アメ、ナメ 内面:凹輪アメ、墨	外底:青磁/10mm/4 内面:青磁/10mm/4	赤	外面上に採用者 名・印字
83	土罐	9.4 6.1	墨/1 墨/1	内面:ナメ 内面:ナメ	1~2mm以下の不規・ 墨/1	墨/1/90%
84	水瓢定	墨/1 墨/1				
85	丸瓦	15.0 1.0	内面:ナメ 内面:墨/1 内面:墨/1	外底:墨N/1 内面:墨N/1	赤	

第4表 地久櫓台・本丸南土堀台出土遺物観察表②

第4章 まとめ

第1節 地久櫓台の構造と年代について

【石垣】

積み方は、野面石（自然石）または粗削りした安山岩や花崗岩を使用した乱積みである。その比率は、ほぼ半々である。ただし、隅角石はすべて花崗岩で、矢穴で割られている石材が多く、直方体に整形されている。この直方体を交互に積み重ねて、稜線を作り出している。

根石は、上の石垣より半石分ほど外へ突出している。また、根石は、基盤である砂礫層の上に若干のグリ石を下に敷いた状態で直接置かれ、胴木等の構造物は存在しなかった。

【櫓台内部構造】

櫓台内部は、石垣裏込のグリ石を除けば細砂によって充填されている。ただし、櫓台下部（第41～43層以下）においては、細砂に粘土をブロック状に入れるか、細砂と粘土の互層として版築している。これは、潮の干満により内部の砂が流れ出ないための工夫と考えられる。

【櫓台の築造年代】

上記の細砂から出土する遺物から、櫓台構築の年代がある程度推測可能である。出土した遺物のうち櫓台築造の年代を示しそうなものは、中国漳州窯系磁器青花皿（第21図7）が16世紀末～17世紀初頭、唐津産陶器皿（第22図15）が17世紀初頭、備前焼鉢（第22図16）が16世紀末である。もっとも新しい時期を採用すれば、唐津産陶器の存在から17世紀初頭となる。

前回の概報では、a層または第11・17～23層から出土した中国漳州窯系磁器や唐津産陶器の存在から、櫓台上部については17世紀前半の築造年代を導き出した。この年代は、生駒家転封後の松平家入封時期（1642年）と近く、櫓台上部が松平家入封時に改修されたことを示唆するものであった。

一方、寛永4年（1627）の「讃岐探索書」などに地久櫓台が描かれていることから、生駒期にはすでに櫓台が存在していた。以上のことから、調査時に新しい時期の遺物が混入した可能性も否定はできないが、現段階では次の仮説を考えておきたい。

①天正16年（1588）の築城以後、寛永17年（1640）の生駒家転封までの間に、櫓台の改修を実施している。

②松平家入封時の改修が櫓台下部まで及んでいる。

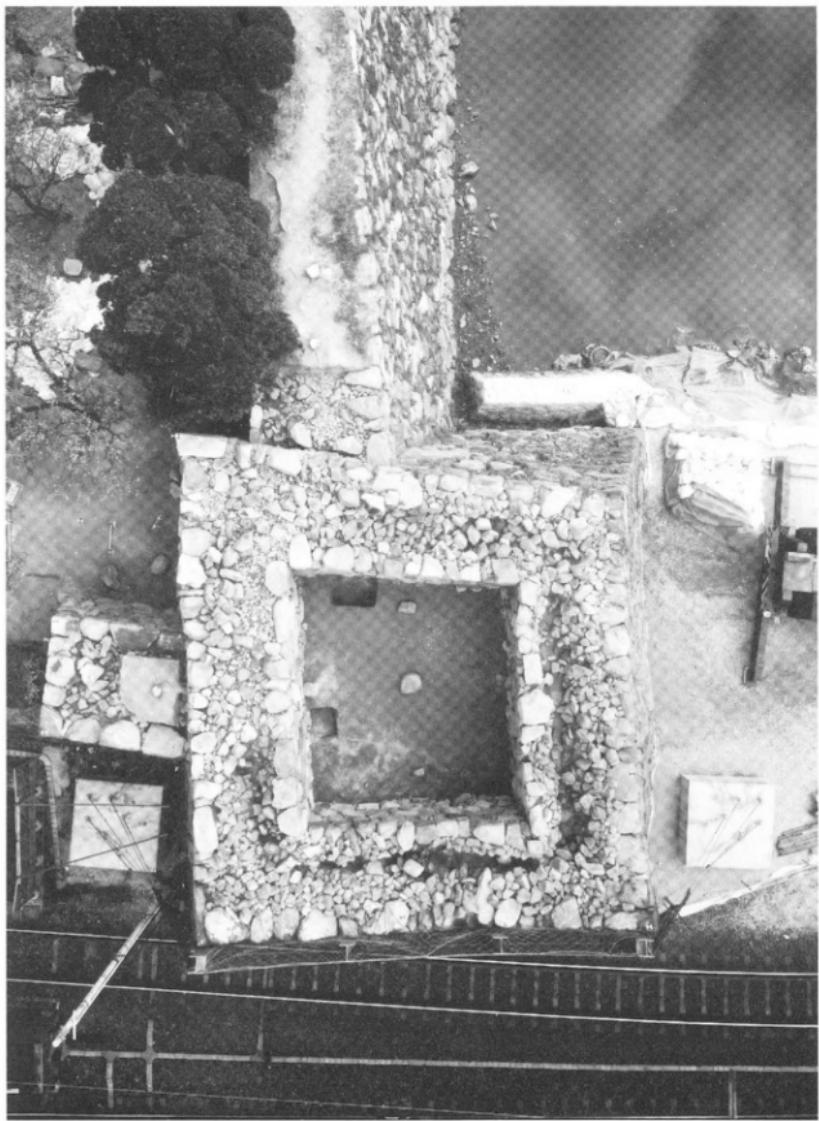
第2節 高松城築城以前

地久櫓台内部に充填されていた砂層（盛土）や石垣裏のグリ石層から、高松城と関係のない12～16世紀の中世遺物が多く出土している。高松城築城の際に、堀を掘って生じた土砂を郭や櫓台を形成するために盛り上げたことは容易に推察でき、築城以前に中世集落が存在したことを想定させる。実際、高松城西の丸跡や東の丸跡、南の武家屋敷跡における発掘調査では、砂層の上に12～16世紀の中世集落が存在することが確認されており、地久櫓台を含め本丸および周辺にも中世集落が存在していたと考えられる。特に、西わずか100mの発掘調査地からは「野原濱村無量寿院」と線刻された丸瓦が出土しており、「兵庫北関入船納帳」に記載がある港町「野原」がこの地にあったことを推測させるとともに、調査地点に無量寿院が存在したことを裏付けた。

さて、地久櫓台から出土した中世遺物を概観すると、15～16世紀のものが主体を占め、12～13世紀の遺物が若干認められる。無量寿院跡においても、15～16世紀の遺物が確認されている。特に無量寿院は、天文年間（1532～1555年）から天正年間（1573～1592年）の間（16世紀中～後葉）、この地に存在したことが縁起によって知られている。ただし、16世紀前葉以前の遺物も認められることから、今後周辺の発掘調査事例を踏まえて、更なる検討が必要である。

報告書抄録

ふりがな	しせきたかまつじょうあとちきゅうやぐらだいはつくつちょうさがいほう							
書名	史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報－平成14・15年度調査－							
副書名								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第76集							
編集者名	川 烟 聰							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL 087(839)2636							
発行年月日	平成16年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	市町村	遺跡番号	北緯					
史跡 高松 城跡	高松市玉藻 町2番1号	37201	34° 20' 47"	134° 3' 8"	H15.1.14 ～ H15.3.11 H16.2.6 ～ H16.3.23	160 m ²	史跡整備	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
史跡高松城跡	城跡	江戸時代	地久櫓台 本丸南土塁台 本丸西土塁台		陶磁器、瓦、 土師質土器、 金属製品、石製品			



地久櫓台全景（上が東）



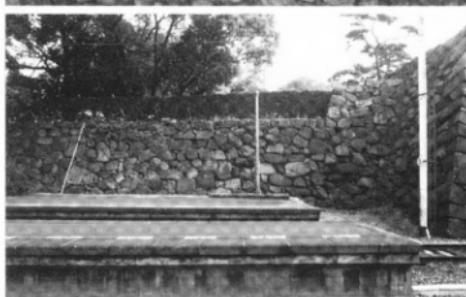
1 櫛台石垣 A面（北から）



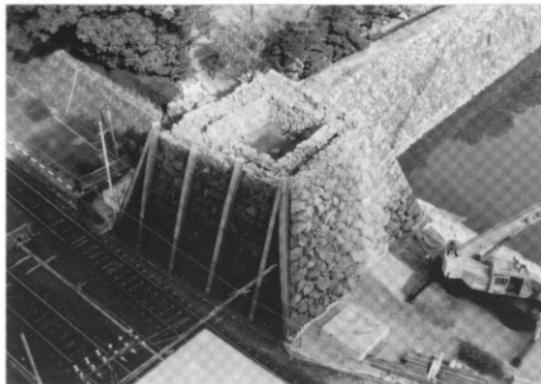
2 櫛台石垣 B面（西から）



3 櫛台石垣 C面（南から）



4 櫛台石垣 L面（西から）



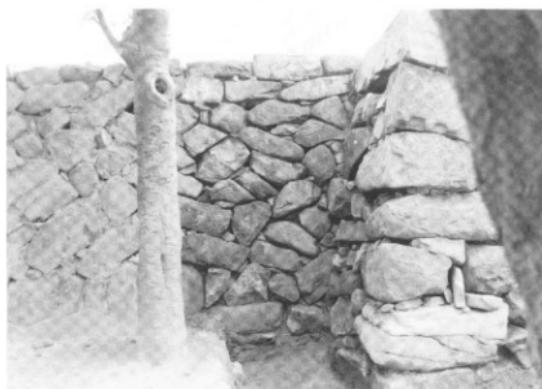
1 檜台全景（南西から）



2 檜台石垣D面（東から）



3 檜台石垣F面（東から）



1 檜台石垣 G面（北から）



2 檜台石垣 H面（東から）



3 檜台石垣 I面（北から）



1 梶台石垣 J面（東から）



2 梶台石垣 K面（北東から）



3 梶台石垣 M面（北から）



1 楼台地下室全景（東から）



2 地下室東壁（N面）



3 地下室南壁東側（O面）



1 地下室南壁西側（O面）



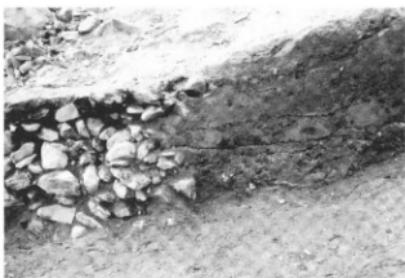
2 地下室西壁（P面）



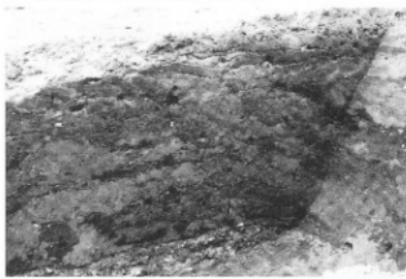
3 地下室北壁（Q面）



1 檜台南北断面（第 36～51 層）



2 檜台南北断面南側（第 37・42・43・48・50・51 層）



3 檜台南北断面中央（第 36～41・43～49・51 層）



4 檜台南北断面中央（第 51～53 層）



5 檜台南北断面南端（第 51 層付近）



6 檜台南北断面南側（第 51 層）



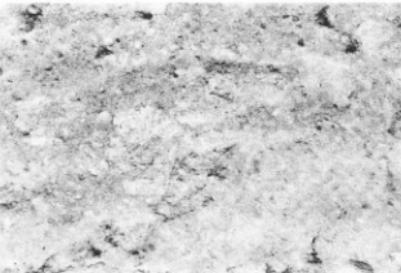
7 檜台南北断面南端（第 53・54 層付近）



8 檜台南北断面西側（第 53～55 層）



1 槽台南北断面中央版築状況（西から）



2 槽台南北断面中央版築状況（近接）



3 槽台南北断面遺物出土状況（第54層）



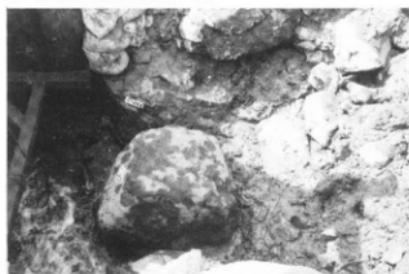
4 槽台南面掘削状況（北から）



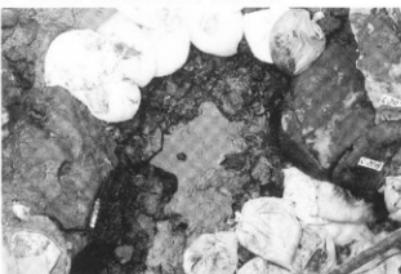
5 槽台南面根石（南から）



6 槽台南面根石下部状況（南から）



7 槽台南面根石検出状況（東から）



8 槽台南面根石撤去状況（南から）



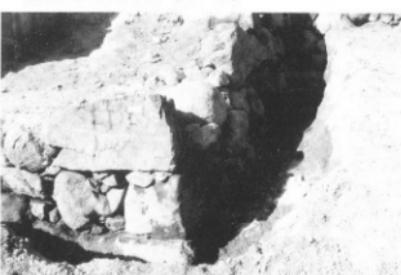
1 槽台南面石垣西端（南東から）



2 槽台南面石垣中央（南から）



3 槽台南面石垣東端（南から）



4 槽台南面石垣東端（南東から）



5 槽台東面石垣南端（東から）



6 槽台東面石垣中央（東から）



7 槽台東面石垣北端（南東から）



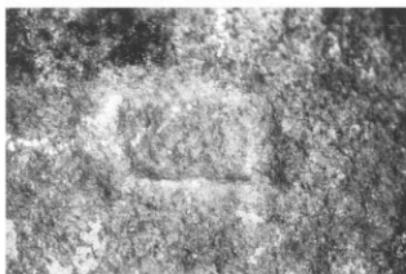
8 槽台東面石垣北端（北東から）



1 本丸南土堀台石垣（北西から）



2 本丸南土堀台石垣（北東から）



3 石垣刻印（A - 55, □）



4 石垣刻印（A - 59 東側面, ○×）



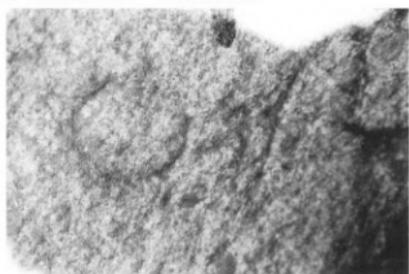
5 石垣刻印（B - 138, □）



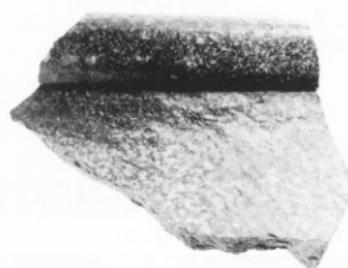
6 石垣刻印（B - 140, 分銅形）



7 石垣刻印（C - 229 裏, ○に×）



8 石垣刻印（D - 78, ○×）



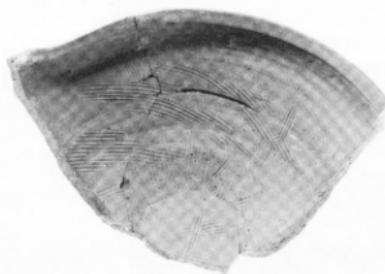
20

4內



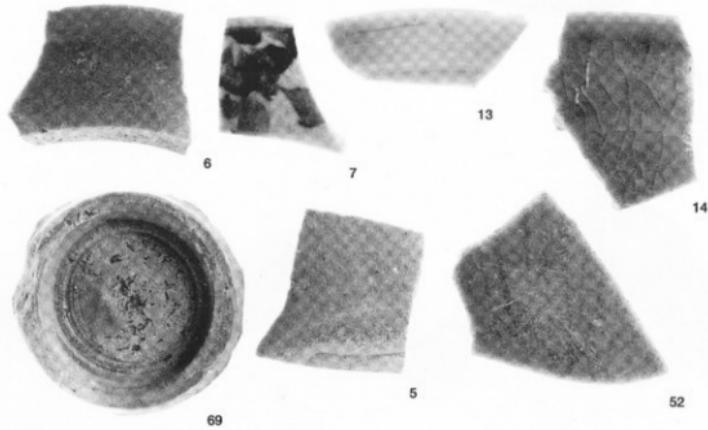
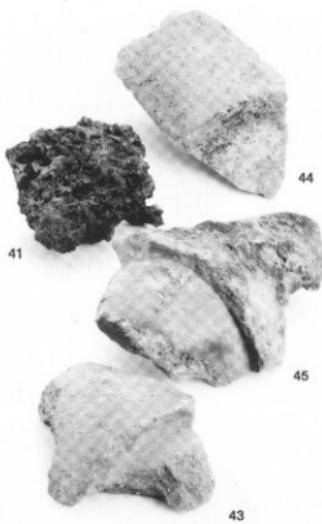
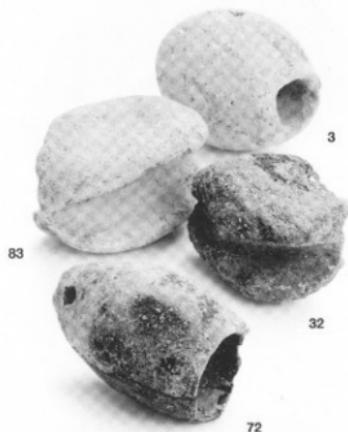
16外

4外



15

16內





42



73



65



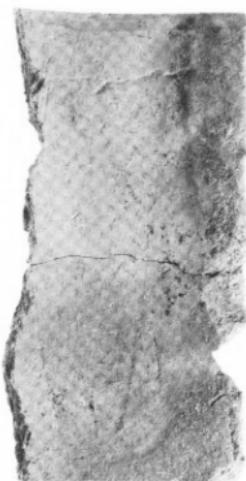
74



66



12



46凹



68



46凸



80



81

史跡高松城跡地久櫓台
発掘調査概報

— 平成14・15年度調査 —

編集・発行 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発 行 日 平成16年9月30日
印 刷 有限会社 中央ファイリング